

研究紀要

第11号

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要

第 11 号

1994

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



大久保領家庵寺（第1段階）



西別府庵寺金草系（第4段階）
交叉鉢齒文縁軒丸瓦同范例1



金草窯 I (第3段階)



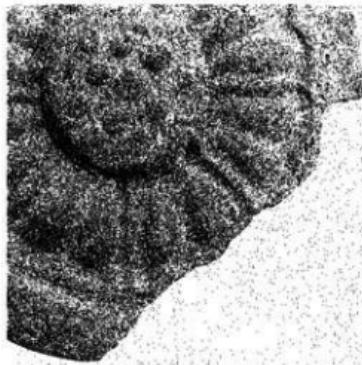
城戸野高寺 (第5段階)



西別府庵守西戸丸山系 (第2段階)



金草窯 I (第3段階)



毛樹原庵寺 (第3段階)

9



金草窯 II (第4段階)

9

交叉鉛文縁軒丸瓦同范例(2)

目 次

序

方形周溝墓と土器 I

福田 聖 1

埼玉県におけるカマド導入期の様相

—カマド、大型甑、壺の形態を中心として—

末木 啓介 55

関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会

田中 広明 83

末野窯跡群産須恵器の胎土と生産

—流通に関する基礎事項—

岩田 明広 117

瓦当範の移動と改範とその背景

—武藏・上野に分布する交叉鋸歯文縁軒丸瓦の変遷から—

酒井 清治 145

埼玉県における古墳関連碑文

大谷 徹 163

新羅・伽耶における横穴式石室の展開

—慶州・陜川を中心にして—

岡本 健一 187

方形周溝墓と土器 I

福田 聖

要約 方形周溝墓出土の土器については、墓制として認識された当初から多くの研究が行われているが、現資料に根差した分析は数少ない。総論的な研究を行う以前に、まずその基礎となる原資料に即した分析が必要である。埼玉県内の比企地域、大宮台地南部の2地域に限定し、弥生時代中期から古墳時代前期の周溝墓出土土器の実見を基礎に、器種構成、変形行為について検討を加え、出土状況から儀礼の構成要素を復元したところ、弥生時代においては畿内を中心とする地域における煮沸行為を中心とする儀礼は行われておらず、土器の変形行為や遺棄の在り方も含めて独自の儀礼が行われていることが明らかである。古墳時代前期に至り、その地域性は変質していくが、それは安直に畿内化と捉えられるものではなく、各地域における新しい儀礼要素の主体的な取り入れによる儀礼の内的崩壊に起因するものと考えられる。

1. はじめに

筆者はこれまで幾つかの拙稿で方形周溝墓について論じて来た。それらは周溝墓を死者儀礼の複合体と考え、周溝墓を構成する遺構・遺物の各々を分析・解釈したものである。ただ、その中では土器について具体的に言及することがほとんどなかった。それは土器の編年作業も含めた総合的検討を志向していた当時の筆者にとって、集成作業の途上で充分なデータを得られないまま分析を行っても仕方がないと考えていたからである。筆者はこれまで自らの考えをまとめて発表する傍ら集成を進めていたが、山岸良二氏を中心に埼玉、東京、神奈川、千葉、群馬、栃木、茨城の研究者十数名で集成と分析を行った単行書を刊行することになり、それに現在まで得たデータを供することにした。その中で各県毎に土器の分析も行われているため(註1)、未発表のそれらとの比較のできない現時点において筆者が同様の作業を行うことには意味が感じられない。ここでは地域を限定し、出土状況や伴出関係、土器に対する変形行為に重点をおいて検討することにしたい。

2. 方形周溝墓出土土器についてのこれまでの研究視点

本論に先立ち、ここでは先学の研究成果とその研究視点をかいづまんでまとめ、本稿における検討方法を提示することにしたい。(註2)

方形周溝墓出土の土器に関しては、方形周溝墓が墓制として認識された当初から注目されて来た。ここでは、周溝墓研究の黎明期・成長期である1960～70年代、資料が爆発的に増加し、研究が停滞した後新たな展開を見せている1980～1990年代に分けて、先学の成果を見ていくことにしたい。

まず、周溝墓が墓制として認識される以前に横川好富氏は、その穿孔行為や規則的配置に着目し、古墳出土の所謂埴輪壺との対比から、検出された溝状造構が墓制であることを既に看破している(横川1963)。周溝墓出土土器の研究に先鞭をつけたものである。大場磐雄氏による墓制としての認識以

後では、穿孔行為や規則的配置をもって出土することから、これらを「供献」したもの、「儀器」であるとの見解が示されるようになる（大塚・井上1969、金井塚1972、等）。その後の研究は「供献」という解釈のもとに行われている。中でも勝部明生氏は穿孔壺を福魂を入れる器として評価している（勝部1976）。既にこの時点において、周溝墓出土の土器は供献されたものであるという視点が定着し、意味論的な論考が提出されている点は、現象理解のための視点の硬直化を示すものと言えよう。その中で鈴木敏弘氏は関東地方の方形周溝墓とその出土土器について概略的ながら表1のようにまとめている（鈴木1972）。資料が不充分な段階のものだが、後の伊藤氏、山岸氏の成果とほぼ合致するものであり、卓抜したものである。

このように1970年代までの研究は「供献」「儀器」という解釈の提示から硬直化に至り、その一方で実態に即した研究の萌芽が見られる時期と言えよう。

1970年代からの高度経済成長による大規模な開発行為は事前調査の大規模化・多発化を生んだ。周溝墓のみに留まらないそれによる爆発的な資料の増加は、研究者個人による集成・分析能力を果かに越えるものであった。1970年代後半からの硬直化しつつあった研究姿勢とこの状況が相まって、1980年代前半には周溝墓出土の土器に関するまとまった論考は見られない。これは周溝墓の研究に限ったものではない。この状況を打破するために各地で多種多様な研究会、シンポジウムが開かれ、新たな視点を形作る基礎となつた。

本稿に關係する論考は1980年代後半に集中する。まず、その後の研究にセンセーショナルな影響を与えた田代克巳氏の研究がある（田代1986）。田代氏は従来「供献」「儀器」という見方が定着していた周溝墓出土の土器について、魏志倭人伝に見られる葬送時の歌舞飲食に用いたもので、その後死者のケガレを払うために破碎して廻棄したと主張した。これについては筆者も含めた様々な批判があるが、「供献」という硬直化した視点から土器を解放した点において積極的に評価できるものである。その後の研究では辻本宗久氏が「供献」「廻棄」「副葬」という範型を前提に分析を行う（辻本1987）等、柔軟な考え方を見られるようになる。

近畿地方では田中清美氏が河内地域を中心に「穿孔・打ち欠き」の見られる土器について整理し、それらが「埋葬時における供献」、「飲食物共食儀礼や墓前祭で使用された」と考えられること、更に前者から後者へと至る場合があることを指摘している（田中1988）。吉田秀則氏は「供献A～C」の範型を前提に、滋賀県下の様相について弥生時代中期から布留式併行にかけての変遷を明らかにしている（吉田1990）。

この畿内中心域と周辺域における両氏の研究は、地域を限定し、実態に即した整理を行い、それについての解釈と意味付けをなそうとするものである。類例の爆発的増加以後の新しい研究動向である。

関東地方においても新たな動きが見られる。伊藤敏行氏は東京湾西岸流域の資料を網羅的に分析し、器種構成における壺→セットの変遷、土器の変形行為の「特定遺構」への偏在、変形行為のある土器と三種土器（高杯・器台・壺）の関係とその性格、それを用いることのできる被葬者像、周溝墓における土器出土の意義について詳細に述べている（伊藤1988）。

山岸良二氏は穿孔土器について、穿孔と破碎の関係、穿孔の焼成前後、部位、器種、赤彩の有無、

表1 鈴木敏弘氏による各時期の比較（鈴木1972より改変し転載）

古墳時代			弥生時代			時期(型式)
前期 (五領II式)	後期 (五領I式)	後期 (終末期)	後期 (前野町式)	後期 (中葉)	後期 (赤生町式)	
下 五領B 区手	金星 番清水 池臨	権現山・和 名向	堤 総台 富士原 台	大 宮 そとごう 加 溝中 ある。	戸 王 子 張 大形・装飾の壺形土器中心 大形・壺形土器が少量伴出 溝中に埋設したか未確認 方台部コーナーに置かれたと思われる。 穿孔は焼成後のみ。	船 沼 方 田 大宮公園内 鍛冶谷1号 方台部 高坏・壺形土器 (装飾のものが多い) 溝中に埋設したか未確認 方台部コーナーに置かれたと思われる。 穿孔は焼成後のみ。
儀礼の簡略化、規模の縮小	心 土器使用の減少、若干の焼成後が伴出 成前が多く、若干の焼成後が焼成前 に多い。	儀器の使用が中心。底部穿孔は焼成前 に多く、若干の焼成後が焼成前 に多い。	壺形土器中心から器形の多様化へ。 壺・器台形土器の使用開始。 底部穿孔は焼成後、少量の焼成前 が伴出。後者は小形壺、壺形土器	壺形土器 (装飾のもの減少・無文、 小形品の増加) 高坏形土器 壺形土器出現 器台形土器出現	壺形土器 (無文・小形品伴出が増 加) 高坏形土器 (壺形土器は未発見) 壺形土器 (装飾のものが多い) 壺形土器に多い。 壺形土器に多い。 壺形土器に多い。	壺形土器中心 (無文・小形品伴出が増 加) 壺形土器 (壺形土器は未発見) 壺形土器 (装飾のものが多い) 壺形土器に多い。
出土せず	(壺・壺形土器の増加)	壺・小形壺形土器・壺 壺形土器・高坏 壺・器台形土器伴出	伴出 焼成前が多く、焼成後も 伴出 焼成前が多く、焼成後も 伴出 焼成前・後とも認められ	焼成後が多く、焼成前も 伴出する。 後者は小形壺・壺形土器 に多い。	焼成後のみ。	壺形土器に集中し、他の 器形は未確認。 焼成後のみ。
ない						底部穿孔(焼成前後)

出土状況、1基当たり、1遺跡内における出土率を整理し、その変遷を提示し、更に課題を提示している（山岸1989）。続いて「供獻土器論」（山岸1990）において、その課題の一部について自ら答え、変形行為が何によるものか、土器出土の意義について述べている（山岸1990）。

このような様相の整理と、それに基づいた解釈を行う研究の後に、更に事例を詳細に分析しよう

とする試みが現れる。

岩松保氏は、周溝墓出土土器の中でも溝中土坑出土のものに着目し、「破碎」タイプの土器供獻は溝内埋葬の土壙墓のみで、完形土器を供獻する方台部の被葬者との階層差を主張している（岩松1992）。

大庭重信氏は、河内地域の弥生時代中期の資料について検討を加え、周溝墓出土土器に特定の器種が特徴的に多く用いられていること、それが液体の煮沸行為に用いられていることを実見をもとに明らかにした。これは葬送儀礼時における煮沸行為の存在を証明するものである。更に氏は煮沸行為を軸に、古墳時代前期までの様相を整理している（大庭1992）。

これらの土器自体の分析とは別に、出土状況の分析も多くなされているが、その中から特に中村倉司氏による東川端遺跡の分析をあげておきたい（中村1990）。中村氏は周溝墓出土の土器は方台部から転落あるいは流入したものであるという前提のもとに、その原位置を発掘時の周溝掘削土を積み上げた方台部の上に据え置いて復元している。これは周溝の埋没と方台部の崩壊、周溝内の遺物の出土を具体的に結び付けたものとして注目される。

以上の先学の研究を、その研究視点から分析してみたい。ここでは、1980年以後のものを取り扱う。まず、方形周溝墓出土の土器が「供獻」行為の一元的結果とみなし、その意義を探ろうとするものとして駒見佳容子氏の研究（駒見1985）があげられる。田代克巳氏の研究も「けがれを払う」「廃棄」という点に固執する点では同様である。山岸良二氏の「供獻土器論」も「穿孔」行為に関して同様である。次に概略的な認識から範型を設定し、その範型がどのように変遷あるいは置換するかを述べたもので、辻本宗久氏や吉田秀則氏の研究があげられる。即ち最初に「範型」ありきなのである。これとは別に事例の分析から、その事例の意味する行為の「範型」を導き出そうとする研究がある。田中清美、伊藤敏行、山岸良二、岩松保氏の研究がそれである。更にこれを一步進めたものとして大庭重信氏の研究がある。これは、土器の実見をもとにそこに遺存する現象のもとなる行為を推定したもので、最も実証性が高い。

これら先学の研究の問題点については折りに触れて取り扱うこととし、以上を参考に本稿における研究方法を提示する。総論的な研究を行う前提として、各資料の仔細な検討が必要である。そのためには土器の出土事例の分析を第一とし、資料の実見を基礎とする。当然のことながら周溝墓出土の全ての資料に当たることは不可能である。従って地域を限定する必要がある。その手段としては土器の分布図を用いることにしたい。土器そのものはあくまで当時の生活の様相の一侧面を示すに過ぎないが、逆にその分布図は当時の人々の活動範囲を間接的に示すものと考えられ、ある程度の社会的な緊密性を示すと思われるからである。弥生時代中期後葉の所謂須和田式（I期）（註3）に該当する資料は現在のところ、埼玉県熊谷市小敷田遺跡、千葉県袖ヶ浦市向神納里遺跡、千葉県君津市常代遺跡で知られるのみである。ここでは、小敷田遺跡の出土資料を主に用いることにしたい。次にII期以後では良好な資料が多く出土し、III期以後所謂「吉ヶ谷式」という特徴的な土器の小分布図を見せる比企地域を対象にしたい。合わせて、南関東的な土器の展開を見せる大宮台地南部の資料と比較を試みたい。

次に具体的な分析方法について述べる。まず、土器そのものについては、器種構成、実見に基づ

く変形行為等の具体的行為が問題になる。

次に遺構との関係性が問題になる。まず出土状態である。既に拙稿でも幾度となく触れているところだが、出土状態の把握はその原位置を復元し、儀礼の段階を知るために不可欠の手続である。それには3次元的な把握、即ち平面的、層位的把握が必要である。これと合わせて伴出遺物、例えば炭化物や焼土等との伴出関係を押える。これはその土器が原位置を比較的保っている場合に、その土器を用いた儀礼の実像を知る有力な手掛かりを提供すると思われるからである。それらの様相をまとめた後、その様相がどのような行為を示すのかを問題にしたい。

本稿は、周溝墓の儀礼全体を研究する前提としてこれらの検討を目的とするものである。

3. 資料の実例

I期 埼玉県熊谷市小敷田遺跡（吉田1991）（第1図）

小敷田遺跡は元荒川流域の熊谷扇状地末端に位置している。今回対象とするI期の周溝墓は4基検出されている。いずれも四隅切れの形態になると思われる。出土遺物量には多寡があり、検討できる資料を出土したのは1号と11号である。

第1号周溝墓は、北東—南西方向14.5m、北西—南東方向14.3mを測る。方台部は削平されており、主体部は検出されていない。各周溝は深さ70~80cmほどで、それぞれに土坑状の掘り込みが見られる。東溝のものは断面観察の結果から周溝掘削と同時に作られたとされている。

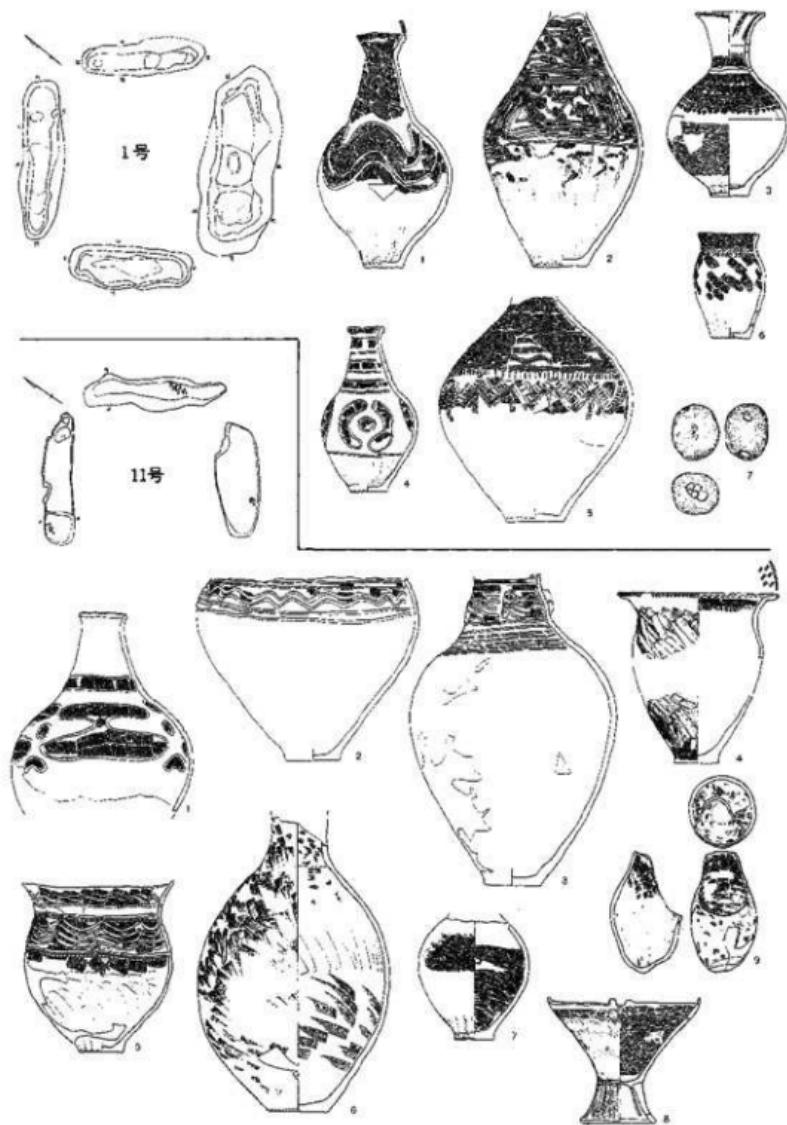
遺物は壺5個、甕1、石器1、自然礫9が出土している。出土土器のうち3~6は2次加熱の痕跡が見られる。1は胸部穿孔、6は底部穿孔である。北東溝中央の溝中土坑からは2の壺が直立して、6の甕が横転した状態で出土している。前述のようにこの土坑は周溝掘削時に一緒に掘り込まれており、1と6は周溝墓完成後ほどなくその中に納められたものと考えられる。また5の壺も南東溝の土坑中から土圧によりつぶれた状態で出土しており、同様の可能性が高い。1の甕は南東溝の東立ち上がり部の底面で自然礫で破碎した状態、3も同じ位置で破碎した状態で出土している。1・3の出土した周溝の立ち上がりは階段状を呈しており、これらの遺物は周溝墓完成から程なく、周溝の入り口部における儀礼に使用された可能性が高い。4は北西溝中央の土坑付近から出土しているが、土坑からは若干離れており直接納められたものとは考え難い。層位的には方台部の崩落土と考えられる5層中からのもので、方台部から転落したと考えられる。

伴出遺物としては1を破碎したと考えられる自然礫がある。この他にも礫が出土しており、周溝墓の儀礼においてこれらが用いられたことはほぼ確実である。

また、周溝覆土最下層で方台部の崩落土と考えられる5層中には炭化物と焼土粒子が含まれており、方台部における火の使用が考えられる。また、この層中からは4の壺が出土しており、それがその際に用いられたものである可能性がある。

第11号周溝墓は、北西—南東方向で12.0mを測る。南西溝は擾乱により壊されている。方台部は削平されており、主体部は検出されていない。各周溝は深さ20~30cmほどで、北西溝の南西側に土坑状の掘り込みが見られる。

出土遺物は壺5、甕2、高杯1、異形の土器1である。全ての土器に2次加熱の痕跡が見られる。



第1図 小畠田遺跡の周溝墓と遺物（吉田1991より改図転載）
(特に表示のない場合、以下では土器1/8、遺構1/320である)

8・9を除きそれぞれ一部を欠失しているが、それが変形行為によるものなのは断定できない。北東溝からは1・2・3・5がほぼ周溝底から並んで出土している。1は横転、2は倒立、3は正位で、5はつぶれた状態である。これは周溝墓完成後程なく、まとめて置かれたものと考えていいだろう。南東溝からは6が倒立した状態で、北東溝からは7が正位の状態で同様に出土している。これも北東溝の状況と同様に考えていいだろう。また、北西溝の南西端にある土坑からは8・9が横転した状態で出土している。1号周溝墓同様に考えていいのであれば、これも周溝墓完成から程なく納められたものと考えられる。また、4の壺が覆土中から出土している。これは、方台部あるいは周溝外における儀礼の存在を示す可能性があるが断定には至らない。

伴出遺物は特に認められない。また、土層が示されておらず、覆土については不明である。

《比企地域》

II期 埼玉県東松山市代正寺遺跡（鈴木1991）（第2～4図）

代正寺遺跡は越辺川と都幾川に挟まれた高坂台地の中央よりやや東寄りに位置する。該期の周溝墓は14基検出されている。全ての周溝墓の方台部内の盛土は削平されており、主体部は検出されていない。この内検討対象となり得る遺物を出土しているのは、第3～6号、9～11、13・15号周溝墓である。9・10号周溝墓以外は四隅切れの形態になると思われる。

第3号周溝墓は南北10.5mを測る。各周溝の深さは北溝25cm、東溝40cm、南溝15cmほどで、底面はほぼ平坦である。

遺物は壺4、高杯1が出土している。出土土器のうち壺以外は2次加熱の痕跡が見られない。東溝では、3の壺、4の壺、高杯が方台部際から周溝底より若干浮いた状態で出土している。鈴木氏は土圧によりつぶれた状態としており、周溝墓完成後程なく掘え置かれたものと考えられる。

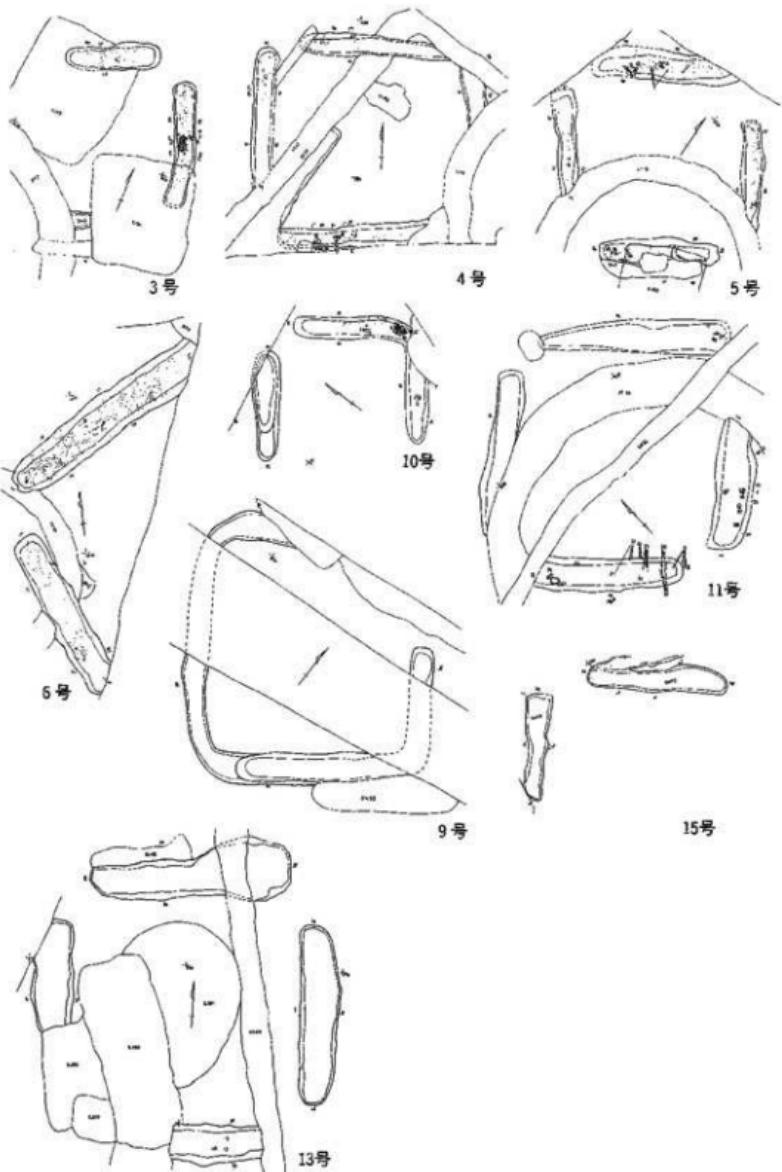
また、周溝覆土最下層で方台部の崩落土と考えられる8層中には炭化物が含まれており、方台部における火の使用が考えられる。

第4号周溝墓は南北6.1m、東西6.6mを測る。各周溝の深さは北溝40cm、東溝10cm、南溝25cm、西溝25cmである。主軸方位が他の周溝墓とは異なり、N-3°-Wとなっている。遺物は壺4、壺2、ミニチュア1が出土しており、壺類以外にもミニチュアの7に2次加熱痕が認められる。ほとんどの遺物が小片だが、南溝から多く出土する傾向が見られる。北溝上層からは壺2点が出土し、周溝外からの流れ込みの可能性がある。南溝からは壺4点が出土している。5は5層堆積後に方台部から転落したと考えられる。6は3・4と共に出土しており、鈴木氏は転落としているあるいは儀礼に使用し、破損した土器をまとめて片付けた可能性もある。

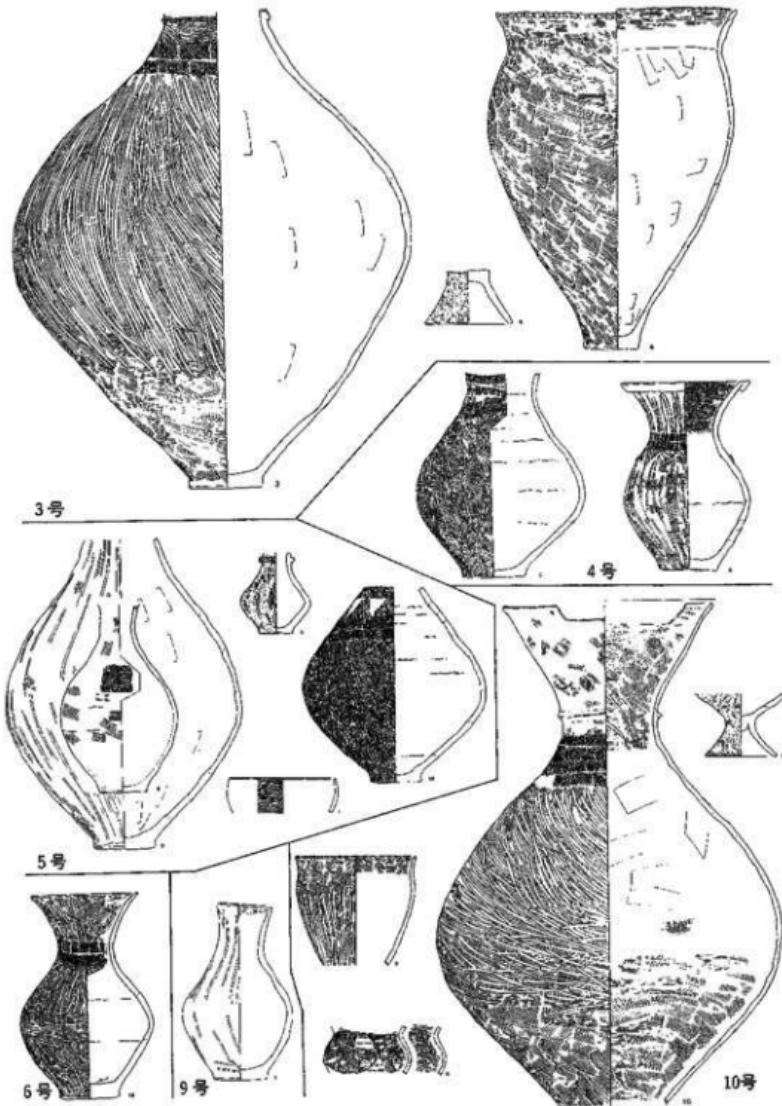
5が転落する以前に方台部から流れ込んだ5層は炭化物を含んでおり、方台部で火を用いた儀礼が行われた可能性がある。7のミニチュアは、内外面にベックリと煤が付着している。

第5号周溝墓は北東-南西方向、南東-北西方向ともに11.8mを測る。周溝の深さは北東溝35cm、南東溝65cm、南西溝55cm、北西溝64cmである。周溝底はほぼ平坦である。6・7号周溝墓と非常に近い主軸方位を示す。

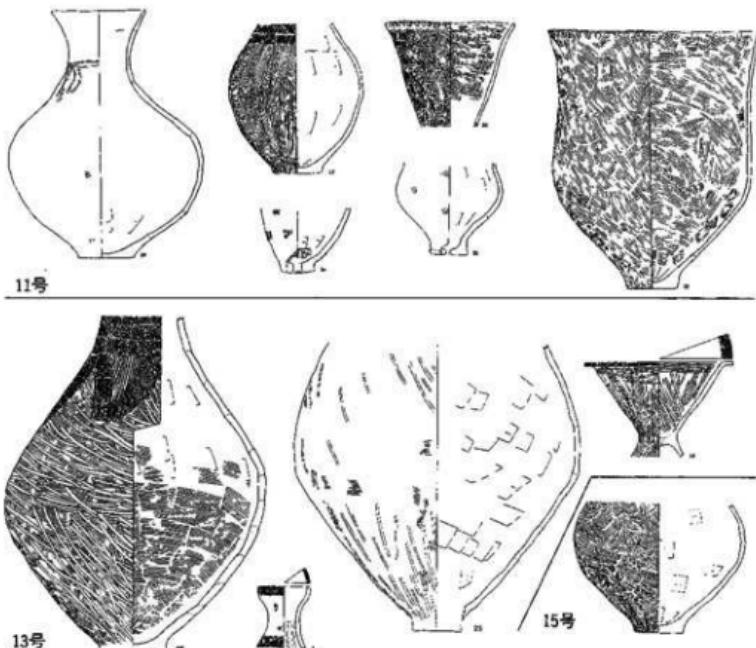
遺物は壺10、高杯1が出土している。このうち5・6・8・10には2次加熱が認められる。北西



第2図 代正寺遺跡の周溝墓（鈴木1991より改図転載）



第3図 代正寺遺跡の周溝墓出土土器(1) (鈴木1991より改図転載)



第4図 代正寺遺跡の周溝墓出土土器(2) (鈴木1991より改図転載)

溝から10・11を含む壺5点が、南西溝から4・6が、南東溝から9、北東溝から5が出土している。北西溝に集中する様相を見せる。8・10・11は方台部からの転落と推定されている。

第6号周溝墓は東半が調査区域外にかかり、規模等は不明だがかなり大型になると思われる。周溝の深さは北溝70cm、西溝90cmである。遺物は壺11、甕2である。小片がほとんどで、大部分が北溝からの出土である。小片の壺・甕に2次加熱を受けているものが認められる。断面の状況からは大半が周溝外からの流れ込みと考えられる。13は方台部から転落したものと考えられる。

第9号周溝墓は北東・南西方向11m、北西・南東方向11.5mを測る。形態は一隅切れを呈する。周溝の深さは北東・南東溝が50cm、北西・南西溝が20cmである。

遺物は壺が2個体出土している。特に1の壺は被熱が激しく、器面が赤変し、煤が付着する。

第10号周溝墓は南東・北西方向9.9mを測る。南西側の周溝はなかったと推定されており、形態は円門である。各周溝の深さは、北東溝25cm、南東溝30cm、北西溝1.0mである。北西溝の南端には緩い段があり、浅くなる。主軸方位は9号周溝墓と一致する。

出土遺物は壺6、甕3、高杯1で、甕以外では壺2点に2次加熱痕が認められる。ほとんどが北東溝、南西溝からの出土である。北東溝では甕2点が底面から、10が2~4層堆積後に破碎されて

出土している。前者は周溝掘削後、間を置かずに儀礼に使用し破損した土器を廃棄したもの、後者は周溝掘削後、一定期間の後に儀礼が行われ、その際に使用されたものと思われる。また、その位置がコーナーに近いことは注意を要するだろう。南東溝では5が4層堆積後に方台部から転落したと思われる様相で出土している。

第11号周溝墓は、南東-北西方向15.2m、南西-北東方向15.4mを測る。各周溝の深さは北東溝30cm、南東溝65cm、南西溝30cm、北西溝40cmである。底面はほぼ平坦である。主軸方位は8~10号とほぼ同方向である。出土遺物は多く、壺25、甕6、台付甕1、高杯1、瓶2である。甕の内35は底部を焼成後穿孔したものであり、甕ではない可能性が高い。この内甕・瓶以外の8点の甕に2次加熱痕が認められる。これらは、北西溝を除く各周溝で、底面からかなり浮き、確認面近くで出土したものが多い。南西溝では5層堆積後に方台部から流れ込んだと考えられるものが多い。23・24の壺は平面的に近接した位置にあるが、周溝内に入ったのは同時ではなく、24が周溝掘削直後であるのに対して、23は確認面近くからのものである。その他の遺物を方台部からの流れ込みとするならば、24は本来的には方台部に置かれていたのではなく、周溝掘削から間をおかず周溝内に納められたものと考えられる。あるいは出土位置が陸橋部近くであることから、入り口部の儀礼に使用された可能性もある。23は方台部に置かれていたものが転落したと考えられるが、その位置から周溝外からもたらされた可能性も残る。また、方台部から流れ込んだと思われる5層は、炭化物を含んでおり、その層中から出土した甕2点も被熱していることから、方台部上で周溝墓完成直後に火を使用した儀礼が行われたと考えられる。南東溝の出土状況は、5層中のものと確認面のものという2つの様相を呈している。前者では甕のため参考にしかならないが29に煤の付着が認められる。後者は大部分が方台部からの転落と思われる。

また、外縁部近くから出土した壺2点、瓶1点が被熱しており、あるいは周溝外における火の使用の可能性もある。特に35を甕でないと仮定するならば、底部穿孔壺を火にかけたものと考えることもできる。北東溝出土の一群は、周溝墓に伴うものか不明と言わざるを得ないが、仮に伴うものであるならば陸橋部際であることから注意を要するだろう。

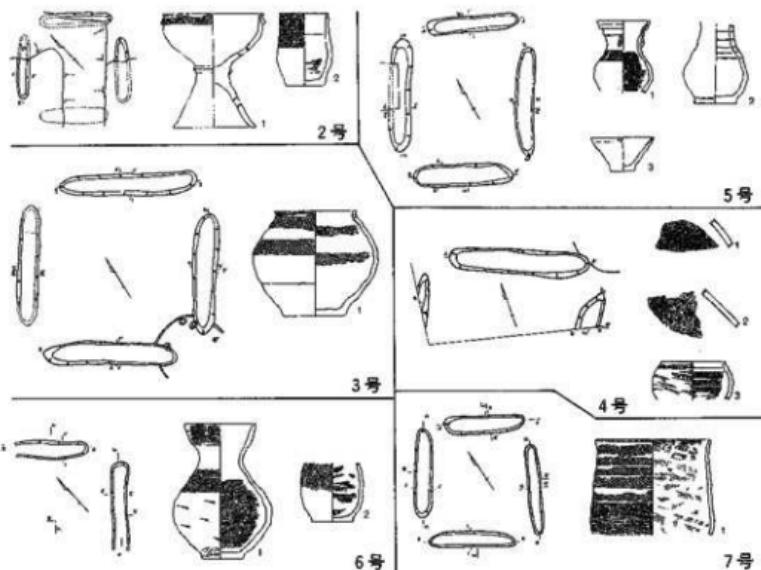
第13号周溝墓は南北17.4m、東西17.6mを測る。各周溝の深さは東溝25cm、南溝55cm、西溝25cm、北溝40cmである。溝底はほぼ平坦である。主軸方位は他の周溝墓と異にしている。遺物はほとんどが小片で壺9、高杯1が出土している。壺4点、10の高杯には若干煤が付着する。10は南溝の炭化物を含む5層中から出土していることから、11号周溝墓2・21同様、火を使用する儀礼に用いられた可能性がある。

第15号周溝墓は2辺のみの検出である。規模は北東溝が8.0mを測る。周溝の深さは北東溝25cm、北西溝20cmである。溝底はほぼ平坦である。

遺物は甕1個体が図示可能でその他は小片である。甕は内外面に若干煤が付着する。

III期 埼玉県坂戸市花影遺跡（谷井1974）（第5図）

花影遺跡は高麗川右岸の坂戸台地西縁部に位置する。周溝墓は8基検出されている。全て四隅切れの形態である。各周溝墓はほぼ同一の主軸方位であり、造営に当たっての企画性と計画性を窺う



第5図 花影遺跡の周溝墓と出土土器（谷井1974より改図転載）

ことができる。また、かなりの削平を受けており、方台部内からの主体部の検出はない。これらの内検討対象となり得る遺物を出土しているのは、第2・3・5～7号周溝墓だが、削平の結果かなりの遺物が失われている可能性があり、本来的にはもっと多くの情報量があったのかも知れない。周溝の覆土は全て自然堆積であり、方台部からの流入土は認められない。そのため、谷井氏が示唆するように、出土遺物を転落とすることは難しいと思われる。その場に置いたと判断してもいいのだろうか。

第2号周溝墓は、第1号周溝墓の南に接する。遺存状況が非常に悪い。規模は北東～南西方向で6.5mを測る。周溝の深さは北西溝が15cm、北東溝が10cm、南東溝が10cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は、南東溝から壺1、高杯1が出土している。いずれも周溝底からかなり浮いての出土である。2次加熱を受ける個体は認められない。

第3号周溝墓は第4号周溝墓の北側に接して位置する。規模は南北方向10.9m、東西方向11.4mを測る。各周溝の深さは北溝40cm、東溝50cm、南溝20cm、西溝25cmである。底面は平坦である。

遺物は短頭壺1点が出土している。2次加熱は受けない。胴部に径10cmほどの焼成後の外側から穿孔が見られる。北溝東端近くの確認面直下から倒立した状態で出土している。転落なのだろうか。

第5号周溝墓は、第4号周溝墓の南に位置し、第6～8号周溝墓に囲まれる状況となっている。

規模は東西方向8.3m、南北方向9.6mを測る。各周溝の深さは北溝40cm、東溝20cm、南溝25cm、西溝65cmである。底面は平坦である。

遺物は小型の壺2と鉢1が出土している。2次加熱は受けない。南溝からの出土が多く、鉢は周溝中央やや西側から溝底よりかなり浮いての出土である。

第6号周溝基は北溝、東溝の一部を検出したのみである。第5号周溝基の南、第7号周溝基の西に位置する。規模は6m以上になると思われる。各周溝の深さは北溝25cm、東溝は20cmである。溝底は平坦である。

遺物は壺1、甕1が出土し、甕には外面に薄く煤が付着する。壺は東溝のやや北寄りから横転した状態で、溝底からかなり浮いて出土している。方台部からの転落の可能性がある。

第7号周溝基は第6号周溝基の東、第8号周溝基の南に位置する。規模は東西7.4m、南北7.5mを測る。各周溝の深さは北溝35cm、東溝15cm、南溝13cm、西溝25cmである。溝底は平坦である。

遺物は甕1点が出土している。2次加熱は受けない。

IV・V期 東松山市下道添遺跡（坂野1987）（第6～8図）

下道添遺跡は市ノ川と都幾川に囲まれた東松山台地南東端に位置する。周溝基は12基検出されている。方台部は削平されており、主体部の遺存するものはない。検討対象となる遺物を出土し、有効な情報が得られるのは、1・4・5・7・9・10・12・13号墓（註4）である。時期的には花影遺跡出土資料に続く根平遺跡4号住居跡出土資料（水村1980）と並行する時期から所謂布留式並行期までの幅があり、本稿では4号をV期にそれ以外をIV期とした。なお、2号墓は前方後方形の可能性があり、ここでは取り扱わない。

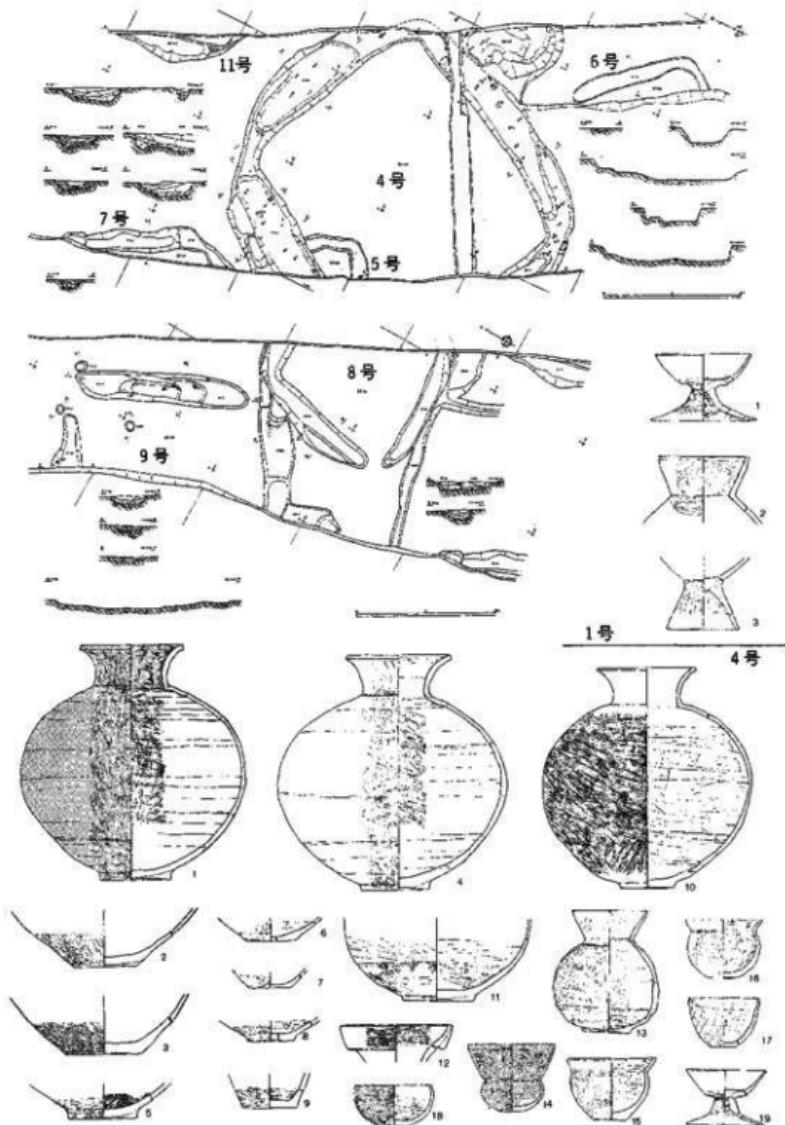
第1号周溝基は南西溝が調査区域外にあり、全容は不明だが一隅切れの形態になると思われる。規模は北西—南東方向で8.2mである。各周溝の深さは北西溝20cm、北東溝20cm、南東溝25cmである。北西溝の中央には深さ20～25cmの溝中土坑が見られる。

遺物は壺2、台付甕1、甕1、高杯1が出土している。完形に近いのは高杯のみでその他は小片であり、2次加熱は受けていない。高杯は北西溝の土坑状掘り込みの上層、周溝の外縁際から出土している。方台部の崩落土と考えられる2層堆積後に、方台部から転落したものと考えられる。

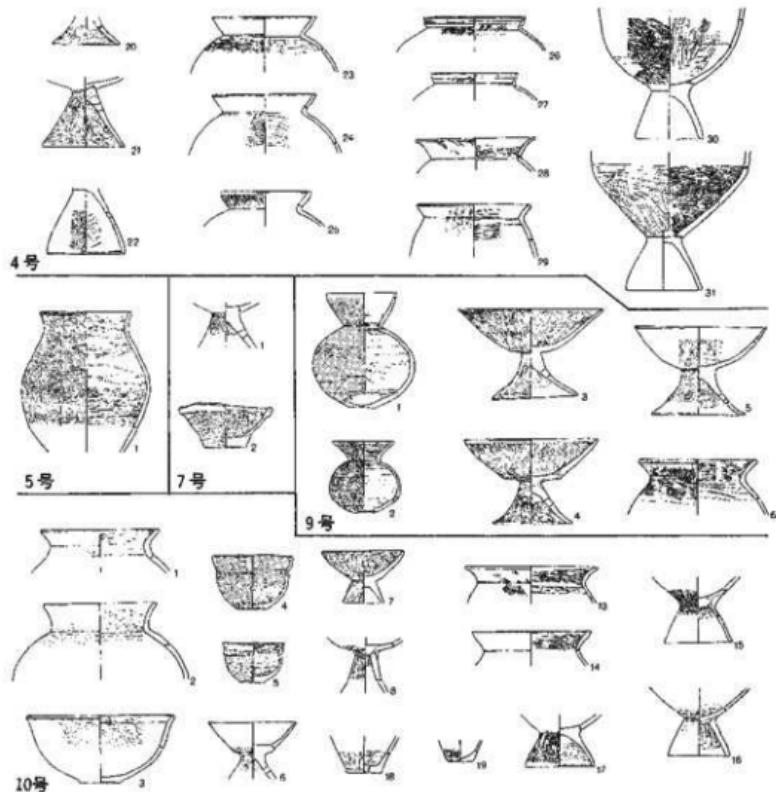
第4号周溝基は北東・南西コーナーが調査区域外にあるが、全周もしくは一隅切れの形態になると思われる。規模は北西—南東方向で18.2m、北東—南西方向で推定20.2mである。各コーナーは浅く、周溝は一段深く掘り込まれる状態になっている。繁雑になるため詳述は避けるが、各周溝にテラス状の段、あるいは溝中土坑が見られる。

遺物は図示可能なもので、壺12、小型壺1、甕9、塙1、椀2、鉢1、高杯4、甕9が出土している。この中には甕類以外にも2次加熱の痕跡が認められるものがある。

北西溝からは、北側の溝底より20～50cmほど浮いて4・5・11・12の壺・鉢・小型高杯が出土している。南側からは1～3の甕・壺・高杯が溝底より30cm浮いて出土している。また、壺・鉢・甕の小片も同様の出土状況を示しているようである。坂野氏はこれらは北西側の周溝のテラスから周溝がある程度埋没した後転落した可能性を指摘している。出土層位である4・5層中には焼土粒子、



第6図 下道添遺跡の周溝墓と出土土器(1) (坂野1987より改図転載)



第7図 下道添遺跡の周溝墓出土土器（坂野1987より改図転載）

炭化物粒子が含まれており、これらがテラスから転落したものであるとすれば、そこに据え置かれる以前に何らかの火を使用する儀礼が執り行われたものと思われる。南東溝では北側から28・29・32が溝底から30cm前後浮いて出土している。これらは方台部から転落あるいは流れ込んだものと考えられる。この内29は外面が一面に赤変し、煤が部分的に付着する。これは転落以前に方台部上において被熱したものと考えられ、火を使用する儀礼的行為の存在が窺える。また、SX02に切られるため、22はその中から出土している。22にも若干の煤の付着が見られる。これとは別に20・27・31・35・37は北東溝から南東溝全体更にSX02まで破片が散乱しており、方台部上で破損あるいは破碎されて方台部の崩落土と共に流れ込んだものと考えられる。北東溝からは中央部の掘り込みを中心にして遺物が出土している。ほとんどが小片である。16は溝底から40cm浮いて出土している。方台部からの流れ込みであろうか。北東溝からは壺の胸部破片が出土しているが、出土状況は不明である。

第5号周溝墓は、第4号周溝墓に接されている。北東溝と南東溝の一部が調査されている。周溝の深さは10~20cmと浅い。南東溝から壺が1点出土しているが転落・破碎等の判断は難しい。外面の全体に煤が付着し、内面にもコゲが見られる。この遺物のみをもって何事かを推定することはできない。

第9号周溝墓は東半部のみが調査されている。四隅切れの形態になると思われる。規模は北西一南東方向で14.0mを測る。各周溝の深さは、北西溝が周溝中央から溝端にかけて浅くなり60~20cm、北東溝は中央が50cm、両端が10~20cm、南東溝が20cmほどである。北東溝の中央には溝中土坑が見られる。また、南東溝にも西側に溝中土坑があると思われる。

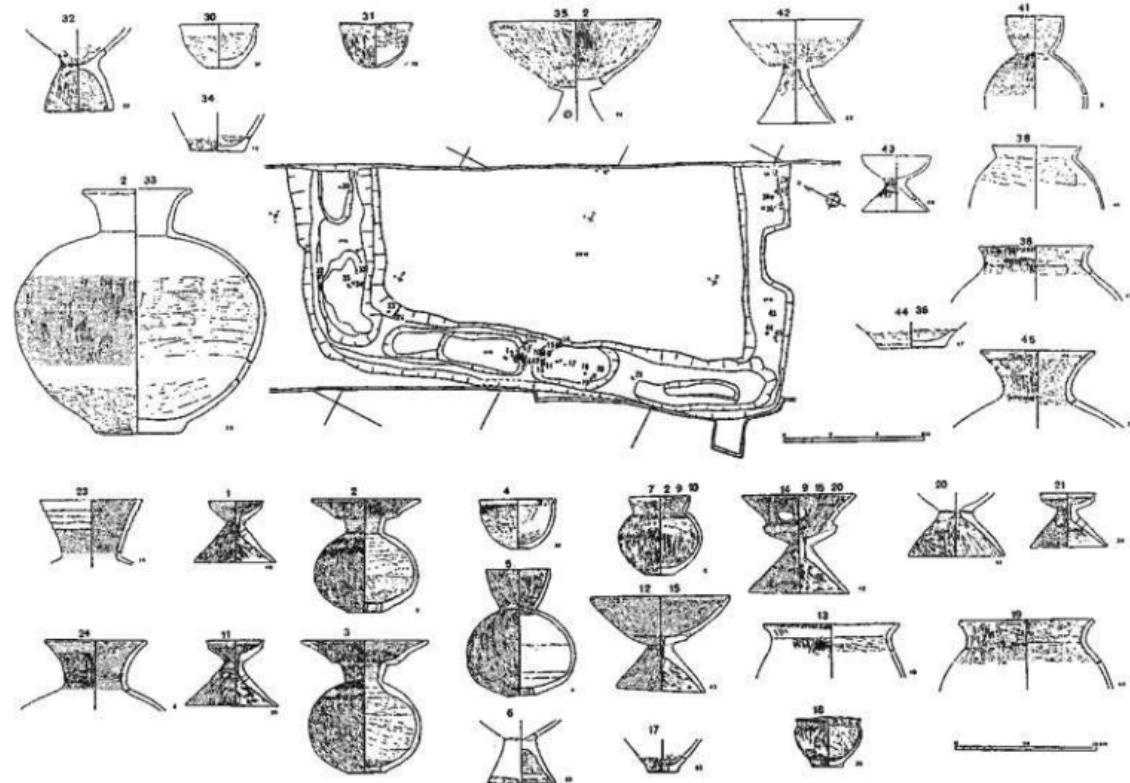
遺物は図示可能なものとして、壺2、甕1、台付壺1、高杯3が出土している。これらの中には2次加熱を受けるもの、底部穿孔がなされるものがある。北西溝からは11の底部穿孔壺が出土している。2層中からの出土とされており、周溝の外側からもたらされたものか、あるいは周溝の埋没がかなり進んだ後にその場に置かれた可能性もある。多くの遺物は北東溝からの出土である。この内6~8は完形度が高い。坂野氏によれば、これらは方台部の崩落土と考えられる3~4層中から出土しており、流れ込みと推定されている。ここで問題となるのが溝中土坑との関係であろう。これらは溝中土坑の範囲内に止まっていることに意図的な行為の可能性がある。特に6・7の高杯と小型壺は近接しているにも関わらずほとんど破損しておらず、8の破損状況と対象である。6の高杯は2次加熱を受けている点も注意される。ここでは6・7が意図的に置かれた可能性も考えておきたい。

第10号周溝墓は北西コーナー部から北、西溝の一部と南溝の一部のみが調査されている。規模は南北方向で14.5mを測る。周溝の深さは北溝60cm、西溝50cm、南溝60cmである。南溝には溝中土坑が、北西コーナーには階段状施設が造られている。

遺物は図示可能なものとして、壺2、鉢3、高杯3、小型壺2、甕2、台付甕3が出土している。鉢には内面が焦げているものが見られる。南溝からは1・3・5・6の鉢・高杯が、溝底から30~40cm浮き、溝中土坑からある程度のまとまりをもって出土している。南溝の覆土は、方台部の流れ込みと考えられる土により構成されており、これらも方台部にまとまりをもって置かれたものが流入したのであろうか。その他の出土状況は把握し難い。

第13号周溝墓は西半部が調査されている。平面形は台形を呈するようである。規模は北西一南東方向で21.5mを測る。各周溝の深さは北西溝1.3m、南西溝0.8~1.1m、南東溝60~85cmである。北西溝は4段に掘り込まれ、最下段は溝中土坑となる。南西溝にも溝中土坑が見られる。南東溝には南から突出する台形の張り出しが認められる。

遺物は図示可能なもので壺20点、高杯5点、小型高杯7点、鉢4点、大型器台3点、小型器台4点、甕5点、台付甕4点、甑1点が出土している。甕・甑以外にも壺・高杯・器台に2次加熱の痕跡が認められるものがある。南西溝からは壺、器台、高杯、鉢等が一括出土している。溝中央の一帯範囲内に出土し、北側からは壺・器台・鉢の9個体の完形土器(1・2・3・5・7・11・12・14)が、その南側からは大型器台、器台、甕(19~21)が出土している。これらについて坂野氏は転落としているが、位置が近接しているにも関わらず完形度の高いこと、直線的な分布が見られる



第8図 下道添道路13号周清墓 (板野1987より転載)

ことから、この場所に置かれたものと考えたい。西コーナー部にも土器のまとまりが見られるが、ほとんどが破片である。24の壺、高杯、小型高杯、甕、ミニチュア高杯が出土している。これらは周溝外からの流れ込みである第10層、方台部からの流れ込みと考えられる第9層からの出土と考えられる。この上層の8層からは多量の焼土が、周溝外から流れ込んでいる。これは周溝外側における儀礼の存在を推定させるものだが、この土器群との関連性は認められないようである。北東溝の法面際からは鉢が2個体(30、31)出土している。方台部からの転落と思われる。南東溝では、張り出しの東西に土器群が見られる。東側では溝底に接して高杯(42)が出土している。一部の破片であり、煤の付着が見られるが現状では儀礼に使用されたのか判然としない。溝底から15cm浮いて小型壺(41)と甕(38)が出土している。張り出しの西側からは壺、小型高杯(43~45)が溝底から15cm浮いて出土している。東側の一一群と合わせて方台部の崩落土と考えられる第12層中からの出土と考えられ転落の可能性が高いが、いずれも破片であり断定には至らない。張り出し部との関連性は不明である。また、遺物実測図と出土状況図の対応関係が不明なものもある。

IV・V期 坂戸市中耕遺跡(杉崎1993)(第9~12図)

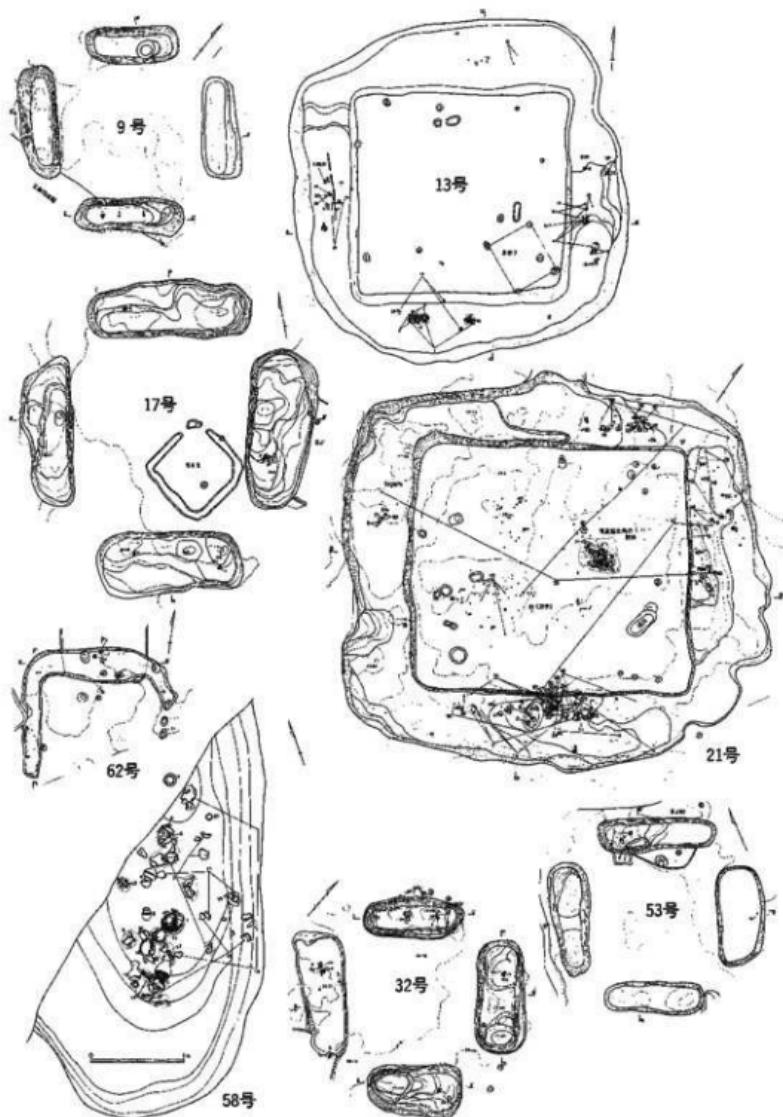
中耕遺跡は越辺川右岸の自然堤防上に位置する。周溝墓は68基検出され、IV・V期にわたって造営されている。詳しく検討を尽くしていないため断定には至らないが、大部分のものがV期と考えられる。この内3基の周溝墓では方台部が遺存していたが、それ以外は削平されている。これらの全部をここで取り扱うのは不可能なので、良好な資料を出土したものに限って見ることにしたい。尚、中耕遺跡の資料については現在箱詰の状態のまま山積みされており、実見はかなわなかった。以下の記述は杉崎氏の観察によるものである。

第9号周溝墓は四隅切れの形態を呈するものである。規模は北東~南北方向12.2m、北西~南北方向11.5mである。周溝の深さは北東溝20cm、北西溝60cm、南西溝85cm、南東溝80cmである。北溝には溝中土坑が、南東溝は段状になり北東→南北方向で深くなる。

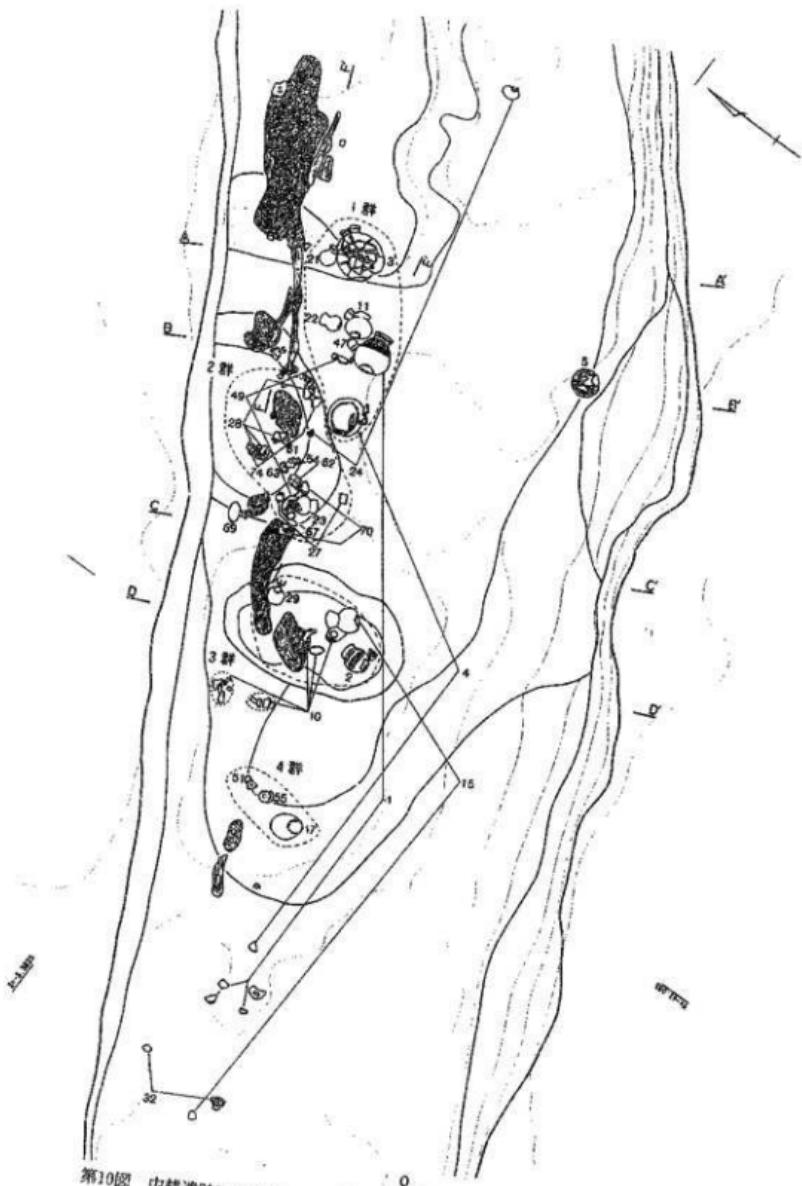
遺物は、焼成後の底部穿孔壺3個体が出土している。2次加熱は受けない。いずれも南東溝から、底面より若干浮いて横転した状態で出土した。杉崎氏はこれらが並んで出土していること等から、互いに共伴するものと考え、溝中土坑の埋葬にかかる遺物群である可能性を指摘している。

第13号周溝墓は全周する周溝を持つものである。規模は東西19.7m、南北19.0mを測る。各周溝の深さは北溝50cm、東溝80cm、南溝1.1m、西溝1.3mである。各周溝はコーナーで浅くなる。東溝にはテラス状施設が、西溝には段が認められる。

遺物は図示可能なもので壺18点、小型壺1点、高杯6点、小型高杯2点、鉢1点、脚付鉢1点、小型器台7点が出土している。この内脚付鉢(21)・器台(23)・高杯(29)は2次加熱を受けている。東溝では壺(4・11・15・16・18)・壺(19)・鉢(20)が、方台部の崩壊とされる7層の灰褐色土中から出土している。方台部からもたらされたものと考えられる。南溝では、壺(1~3・10・13・14)がやはり同様の層位から出土している。杉崎氏はこれを周溝埋没開始から程なく遺棄されたものとしている。西溝でも同様の層位から壺(6・17)・器台(23~25)・高杯(29・30・33)が出土している。これも同様に遺棄されたものと評価されている。北溝では方台部の崩落土と考えら



第9図 中耕遺跡の周溝墓（杉崎1993より改図転載）



第10図 中耕遺跡21号周溝墓南溝出土状況(杉崎1993より転載)
— 20 —

れる7・8層中から壺(12)、脚付鉢(21)、高杯(32)が出土している。方台部からの転落と考えられる。

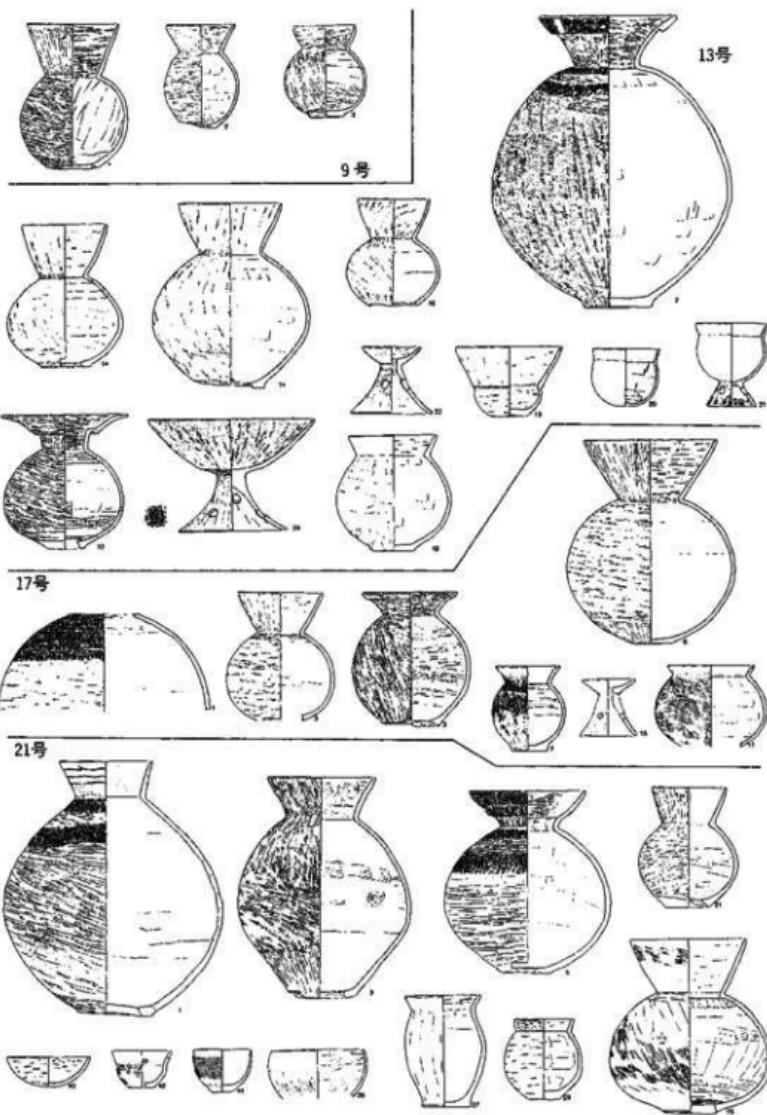
また、この周溝墓では西溝の土器群と共に棒状木製品が出土している。これも同様に埋没から程なく周溝内に入れられたものと考えられる。

第17号周溝墓は四隅切れの形態を呈している。規模は南北19.7m、東西19.1mを測る。各周溝は不整形の段を持つ。深さは北溝60cm、東溝80cm、南溝50cm、西溝80cmである。

遺物は壺9、小型壺1、高杯1、小型器台1、台付甕4である。2次加熱は受けない。東溝では壺(1・2)・台付甕(14)が方台部からの流入土である2層中から出土し、方台部からの流れ込みと考えられる。南溝では溝底から若干浮いて壺(3・4・7・9)・器台(15)が出土している。この内3・7・9は完形度が高く、杉崎氏が述べるように遺棄されたものと考えられる。それ以外は周溝墓外からの流れ込みと考えられる。西溝からは11の台付甕が出土しているが、完形度が低く溝底からかなり浮いており、流れ込みと考えられる。北溝では8が溝底から若干浮いて破碎された状態で出土し、投棄と評価されている。

第21号周溝墓は全周する形態をもつもので、方台部の盛土が遺存する。主体部は検出されていない。方台部上の盛土はかなりの擾乱を受けているが、盛土自体は暗褐色土とローム土を交互に積み上げたたき締めたしっかりした構造をもっている。方台部上の旧表土には、そのたき締めによる窪みが見られ、杉崎氏はそれを盛土の範囲と想定し、テラスの存在を推定している。なお、盛土内からは擾乱中から刀子1点が出土した他は本跡に伴うと考えられるものは認められない。東溝、南溝には不整形の掘り込みが見られ、土坑状を呈する部分もある。北溝には段が認められる。各周溝の深さは、東溝90cm、南溝70cm、西溝85cm、北溝1.0mである。

出土遺物は壺29、小型壺4、甕2、台付甕4、鉢3、脚付鉢6、ミニチュア台付甕1、器台17、異形高杯1、高杯5、小型高杯7が出土している。東溝では壺(8・9・14・18)・器台(60)が溝底から若干浮いた状態で出土し、「遺棄」と評価されている。72・73は方台部からの崩落土である7'層中からの出土であり、「転落」とされている。壺(8・9・14・18)には焼成後の穿孔が見られる。南溝からは多くの土器が出土した。(第10回)その様相については杉崎氏が詳述しているので概略を述べる。土器群は、その出土位置から四群のまとまりをもって出土している。1群は壺(1・3・4・11・21・22)と脚付鉢(47)より成り、正立、もしくは横転した状態で出土している。壺にはいずれも焼成後の穿孔が施されている。2群は、小型・中型の壺(23・27・28)、器台(54・61～63・67)、高杯(70・74)より構成される。3群は小型・中型壺(2・10・15・29)で構成される。2は焼成後穿孔、15も底部が打ち欠かれ、その破片が同一周溝中から出土している。10は破碎され、東溝の破片と接合関係がある。29は完形品である。器台(61)は2次加熱を受けている。4群は壺(17)と器台(51・55)により構成される。この他に5・24・32の壺が出土している。1～4群及びこれらの土器群は、溝底もしくはそれより若干浮いての出土であり、完形度が高く、出土位置も近接することから、杉崎氏が述べるようにそのまま置かれたと考えていいだろう。また、これらに伴って焼土・炭化材が出土している。この土器を使用した儀礼の際の木製品、火の使用を窺わせるものである。上層からは朱も検出されている。西溝からは中央やや北寄りの溝底から壺(5)、器台(50・



第11図 中耕遺跡の周溝墓出土土器(1) (杉崎1993より改図転載)

57・59)、高杯 (71・75) が出土している。これらは直線的な位置関係にあり、杉崎氏が言うように置かれた（遺棄された）ものと思われる。また 5 の壺は南溝の破片と接合し、遺棄の同時性が考えられる。北溝からは壺 (16)、脚付鉢 (43~45)、器台 (52・53)、高杯 (68・76・77)、ミニチュア台付壺が出土している。これらは溝底もしくは若干浮いてまとまりをもって出土すること、完形度が高いことから置かれたものと考えられる。16には底部に焼成後穿孔が施されている。また 2 次加熱を受けた 13 の壺が、方台部から流れ込む状態で出土している。

第32号周溝墓は四隅切れの形態を呈する。規模は南北 17.4m、東西 16.4m を測る。各周溝の深さは、東溝 60cm、南溝 90cm、西溝 40cm、北溝 90cm である。北溝溝底には段が、東溝・南溝の溝底は不整形に掘り込まれ、土坑状を呈する部分がある。北溝の外周にはテラス状の段が認められる。

遺物は壺 4、小型壺 2、鉢 1、器台 4、高杯 2、大型器台 1、台付壺 1 が出土している。東溝からは壺・器台・装飾器台 (7・12・13) が出土している。7・12 は溝底から 10・20cm 浮き正立して出土している。この両者は周溝がある程度埋まつた後に置かれたものと考えられる。13 は 4 層堆積後破碎されたものである。これらは 2 次加熱を受けている。西溝では溝底から 10cm 程浮いて壺 (2)、器台 (9・10)、高杯 (14) が出土している。これらは遺棄されたものと評価されている。9 には 2 次加熱痕が見られる。また、8 の台付壺が南端の落ち込み部分から出土し、入り口部の儀礼に使用された可能性がある。北溝からは壺 (1・5・6)・器台 (11)・高杯 (15) が方台部からの流れ込みと考えられる 3・4 の同一層位から出土し、転落と評価されている。これらは 1・3 を除いて 2 次加熱を受けている。3 の壺は確認面直下から出土しており、周溝の埋没終了直前に置かれたと考えられる。

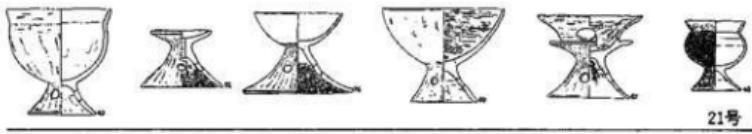
第53号周溝墓は四隅切れの形態を呈するものである。規模は東西 12.0m、南北 11.0m を測る。各周溝の深さは北溝 70cm、東溝 50cm、南溝 35cm、西溝 75cm である。北溝には溝中土坑が、西溝には北西部にテラスが認められる。遺物は壺 3、小型壺 2、壺 1、鉢 1 が出土している。東溝からは小型壺が確認面直下から出土している。北溝では壺 (1・3・5)、鉢 (7) が西端近くの溝底から若干浮いてまとまって出土している。1 は残存率が低く、杉崎氏も述べるように流れ込みと考えられ、それ以外は置かれたものと思われる。2 次加熱を受けるものは認められない。

第58号周溝墓は 1 部のみの調査である。東溝・南溝とも深さ 35cm を測る。

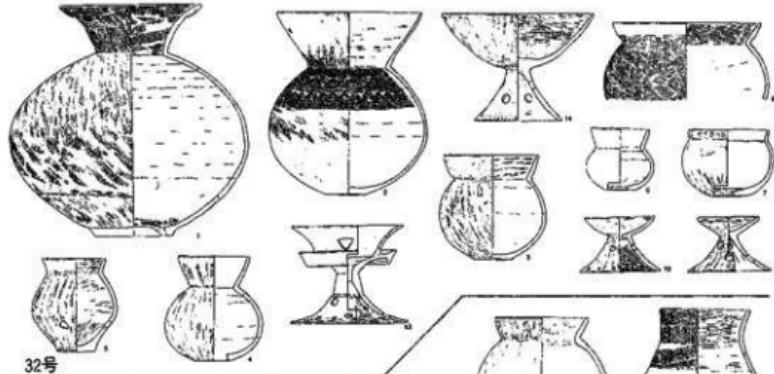
遺物は、壺 8、台付壺 3、小型壺 4、鉢 3、壺 1、高杯 1、脚付鉢 1 が、東溝南端部溝底から集中して出土している。いずれもこの場所に置かれたものと考えられる。壺類を除く壺 (2・5・6)・脚付鉢 (19) に 2 次加熱痕が認められる。焼土等の検出がないため、他の場所で使用されたものが置かれたのであろうか。

第62号周溝墓は北半部のみが調査されている。周溝の形態は調査範囲で「」である。各周溝の深さは東溝 20cm、西溝 10cm、北溝 25cm である。周溝内、方台部内のピットは本跡に伴うか不明である。

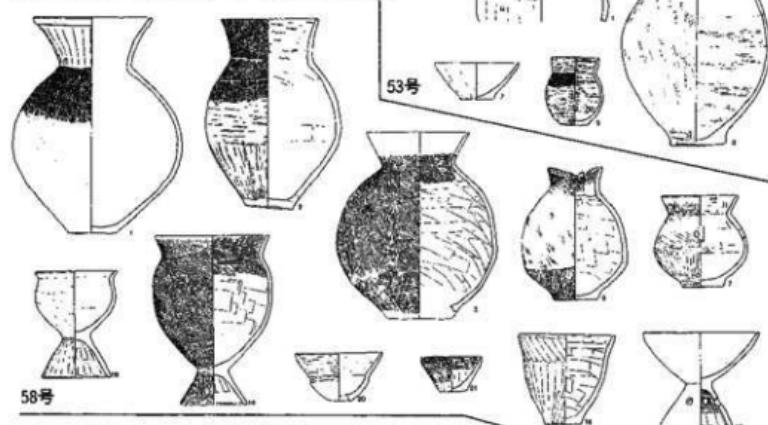
遺物は壺 4、高杯 2、鉢 2 が出土している。2 次加熱を受けるものは認められない。北西コーナーでは鉢 (6) が、西溝からは鉢 (5) が、各々溝底から出土し、周溝埋没から程なく置かれたものと思われる。本跡で特筆されるのは、北溝よりの朱の出土であろう。これは 2 の壺胴部の破片を受けにした中に残されたもので、その上の横軸した高杯により蓋がされたと推定されている。周溝墓



21号



32号



53号



58号

62号

第12図 中耕遺跡の周溝墓出土土器(2) (杉崎1993より改図転載)

における朱の使用を裏付けると共に、それが容器ごと埋納される場合があることを示す例である。

(大宮台地南部地域)

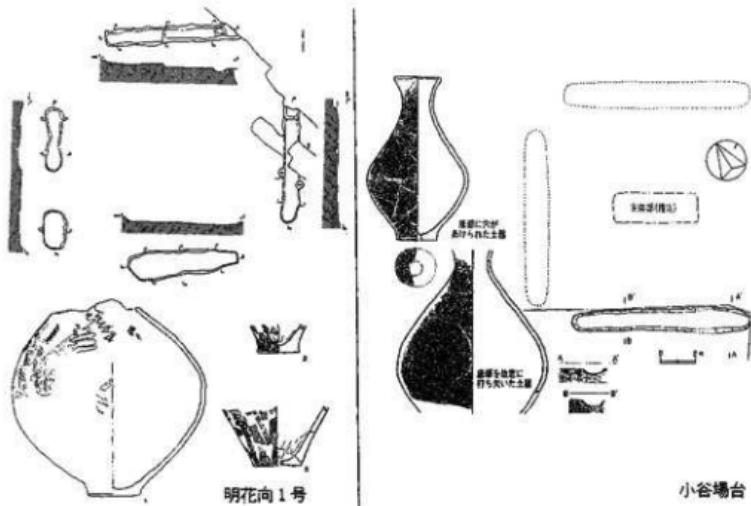
次に比較のために南関東系土器を出土する地域として大宮台地南部の資料を見していくことにしたい。

II期 埼玉県浦和市明花向遺跡（鶴持1984）

明花向遺跡は大宮台地の南部、浦和支台の南端に位置する。検出された周溝墓はA区で2基、B区で1基の計3基である。いずれも四隅切れの形態を呈するもので、方台部は削平されており、主体部の遺存は認められない。検討対象となり得る遺物が出土しているのは、A区第1号周溝墓のみである。

A区第1号周溝墓は、南北13.5m、東西15.0mを測る。各周溝の深さは北溝20~40cm、南溝20cm、東溝・西溝10cmである。北溝には周溝の中程で段が認められ、東部には橢円形の溝中土坑が認められる。その他の溝底はほぼ平坦である。

遺物は図示可能なもので壺1、甕2が、その他に壺3、甕1、鉢1の小破片が出土している。壺には2次加熱痕は認められず、甕には煤が付着する。1は、北溝末端の溝中土坑際の周溝底から若干浮いて、横転した状態で出土している。方台部からの転落とも考えられるが、その中に含まれる焼土・炭化物から2~6層が方台部から流れ込む以前に、その場に置かれたものと考えられる。これらは方台部における火を使用する儀礼の存在を窺わせる。その他の遺物は南溝の2~3層中から



第13図 明花向遺跡・小谷場台遺跡の周溝墓と出土土器
(鶴持1984、柿沼1988より改図転載)

の出土で方台部からの流れ込みと考えられる。これらの原位置等についての推定は行き難い。

III期～V期 埼玉県戸田市鍛冶谷・新田口遺跡（塩野・伊藤1968、西口1986、小島1992・1994）

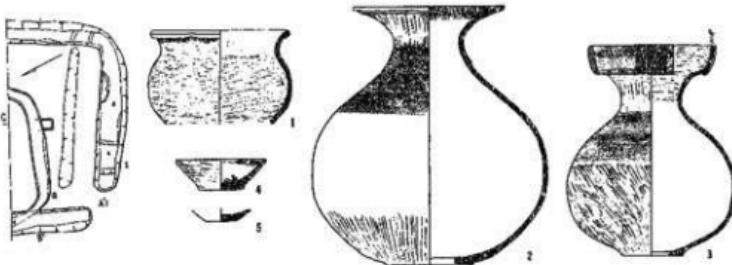
鍛冶谷・新田口遺跡は荒川左岸（旧入間川）の自然堤防上に位置する。坂戸市中耕遺跡と並ぶ県内最大規模の周溝墓群で、現在までに100基以上が調査されている。時期もIII期からV期に渡って造営されている。

これらの周溝墓の全てについてここで詳細に見ることは到底かなないので、ここでは各時期で良好な資料を出土したものに絞って見ていくことにしたい。

III期 第61号周溝墓

遺構の南半部が調査されている。規模は東西13.0mである。南西コーナーに陸橋部を持つ形態を呈する。各周溝はコーナーが浅く中央が深くなり、50～60cmの深さである。南溝にはテラスが、東溝には溝中土坑が認められる。

遺物は、図示可能なものとして壺3、広口壺1、台付壺1、鉢1が出土している。これらには2次加熱を受けた個体は見られない。西溝では周溝墓外から流れ込んだと考えられる褐色土中から鉢が出土している。これが周溝内に置かれたものなのか、あるいは転落したもののかは判然としないが、方台部の崩落土には伴わないことから前者の可能性が考えられよう。南溝からは底部穿孔壺2点と広口壺1点が出土している。これらは方台部からの流れ込みと考えられる暗褐色粘土が堆積した上位から出土している。転落とも考えられるが、その完形度の高さと写真から窺える出土時の様相から周溝の埋没途中に置かれたたるものと考えたい。東溝では方台部の崩落土と考えられる黒褐色土から、壺の底部が出土している。



第14図 鍛冶谷・新田口遺跡第61号周溝墓と出土土器
(塩野・伊藤1968より改図転載)

IV期 第12・39・44・86号周溝墓

第12号周溝墓は西溝の一部と東溝の全体が調査されている。南側の中央に陸橋部をもつ形態になると思われる。規模は東西12.5m、南北12.8mを測る。周溝の深さは50~70cmで、ブリッジに向かって徐々に浅くなっている。

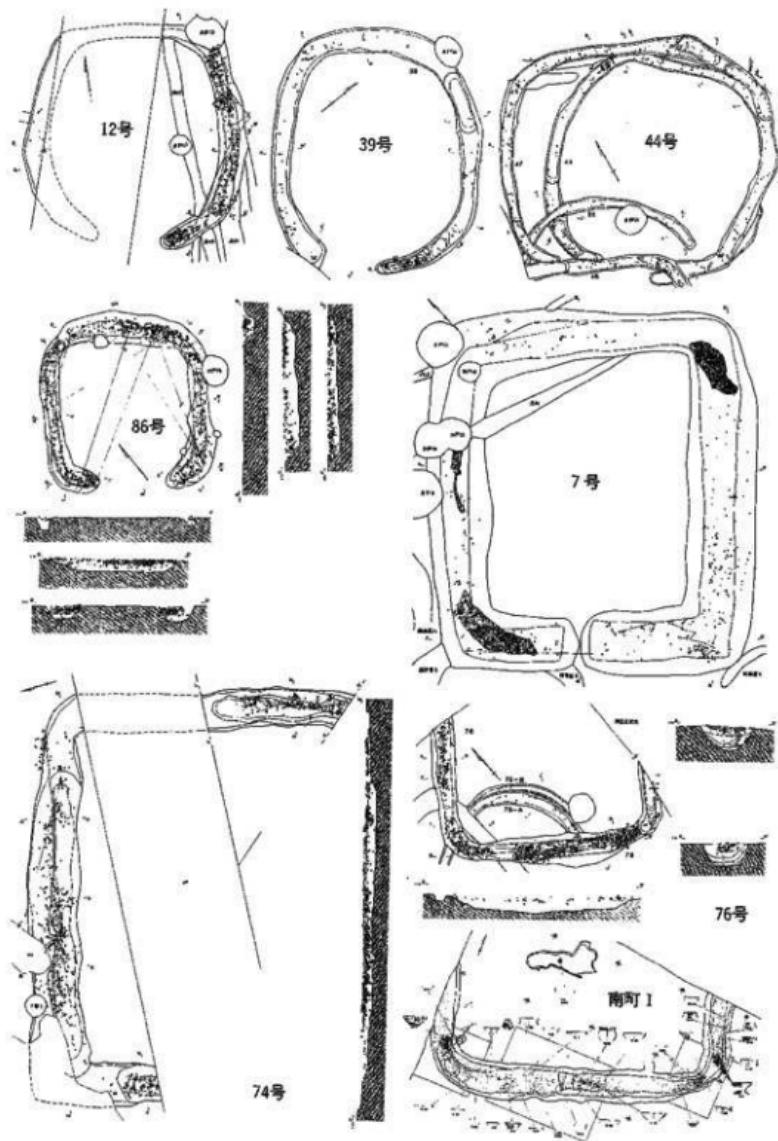
遺物は壺6、小型壺4、大型鉢1、甕5、台付甕12、鉢2、器台3、高杯8が出土している。9の小型壺の口縁部に若干煤が付着する他は、甕類以外2次加熱痕は認められない。この周溝墓で注目されるのは、時期の異なる遺物が層位を違えてまとまって出土している点である。まずIV期の遺物として、1・2の壺をあげることができる。これは陸橋部底面から、一括破碎した状態で出土している。次に、V期の遺物は東溝確認面直下から一括してまとまった状態で出土している。この両者は遺物の時間軸である土器編年と遺構の時間軸である埋没の双方が、儀礼の複時性を示している例である。また、1は8号周溝墓出土土器とも接合関係があり、両者の近い関係性が窺える。

第39号周溝墓は全掘されている。南北に長く、各周溝も丸みを帯び、いびつな隅円方形を呈している。規模は南北14.4m、東西12mを測る。各周溝の底面はほぼ平坦で、深さは30cmほどである。陸橋部付近と北東コーナーに溝中土坑が認められる。

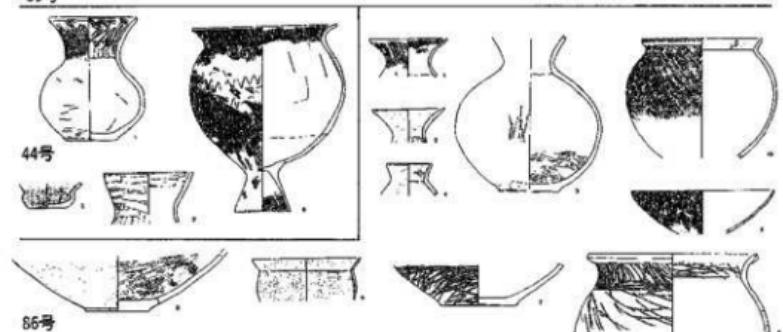
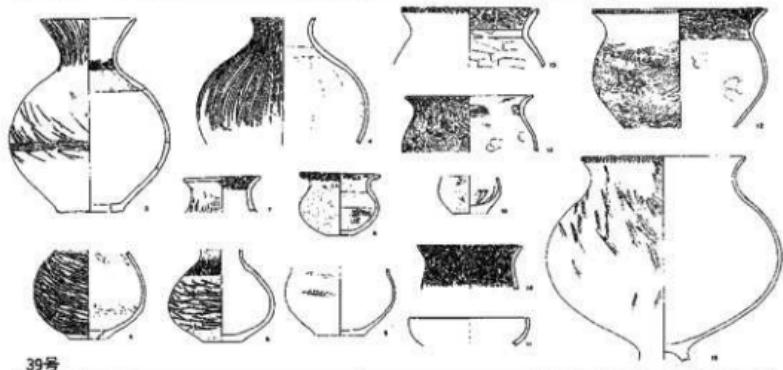
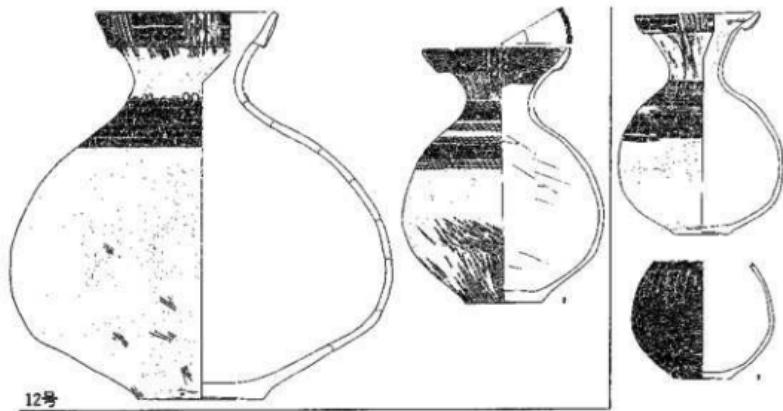
遺物は壺7、広口壺2、小型壺1、碗1、甕4、台付甕3が出土している。甕類以外にも4の壺の内面が焦げ、9の小型壺の内面に若干の煤の付着が認められる。北西コーナー、南東コーナー、陸橋部東側の溝中土坑に遺物が集中する傾向が見られる。南西コーナーからは広口壺、甕、台付甕(5・9・12・16)が、北西コーナーからは壺、広口壺、小型壺(1・2・4・8・10)が、北東コーナーの溝中土坑上層から甕(14)、南東コーナーから甕(13)が出土している。この内残存率の高いものは1・8のみで、その他は小破片であり、いずれも上層からの出土で、同時期の遺構も近隣に存在することから資料として供し得ないものと考えられる。ブリッジ東際の溝中土坑からは壺・台付甕(3・6・17・18)が、図示不能な小破片と共に一括して確認面直下の上層から出土している。この内残存率が高いものは3・6であり、直接的に儀礼に使用した可能性のあるものはこの両者に限られる。それ以外はある意味で「廃棄」したもので、これも儀礼行為の一部と考えられる。

第44号周溝墓は全掘されている。南側中央に陸橋部を持つ形態である。各周溝ともかなり丸みを帯びている。規模は東西12.8m、南北12.6mを測る。各周溝底ともほぼ平坦である。南西コーナーに溝中土坑が認められる。

遺物は壺、小型壺、台付甕が出土している。台付甕以外にも1の壺には内外面に点々と煤が付着している。南西コーナー、北東コーナーに集中する傾向が見られる。南西コーナーの溝中土坑中からは1の壺が底面から、5の台付甕の脚部が底面から10cm程浮いて出土している。土層断面が示されていないため断定はできないが、溝中土坑に伴うものと考えていいだろう。2・4もこの上層からの出土であり、この土坑に伴う可能性もある。北東コーナーからは6の台付甕が底面から横転し、土圧につぶされた状態で出土している。この上層の方台部からの流れ込みと考えられる6層には焼土粒子がまばらにふくまれており、方台部における火を使用する儀礼に使用された後、据え置かれた可能性もある。なお、第48号周溝墓も同様の出土状況を示している。



第15図 銀治谷・新田口、南町遺跡の周溝墓
(西口1986、福田1987より改図転載)



第16図 錬冶谷・新田口遺跡の周溝墓出土土器（西口1986より改図転載）

第86号周溝墓は全掘されている。南側の中央に隣接部を持つ形態である。規模は東西9.6m、南北10.2mを測る。各周溝はコーナーが浅く、中央が深くなり、40~60cmの深さである。ほくせいコーナーに溝中土坑が認められる。

遺物は図示可能なものとして、壺・広口壺・椀・高杯・台付甕が出土し、それ以外にも多量の土器片が得られている。台付甕以外にも6の広口甕、9の高杯に2次加熱痕が認められる。特に北溝西側コーナー寄りと南溝ブリッジ際からの出土が多い。これらは、相互に接合関係があり、北西・南東コーナーや西溝のものとも接合関係が認められる。加えて残存率が低く、出土層位が方台部からの流れ込みである1・2層中であることから、方台部上で使用されたものが破碎されて、一定の期間内に廃棄されたものと考えられる。また、図示可能破片はブリッジの東西際から出土するものが多く、ブリッジがその際に重視されていたものと思われる。それらが皆壺であるのも興味ある点である。

V期 7・12・74・76号周溝墓

第7号周溝墓は、76号と並んで最も大型なもの1つである。南西部中央に隣接部を持つ形態である。規模は東西18.6m、南北20.0mを測る。各周溝の底面はほぼ平坦で、深さは1m前後である。

遺物は台付甕、小型壺、器台、古墳時代後期の鉢、杯、土錘が出土している。杯には2次加熱痕が見られる。南コーナーでは、底面から小型甕(4)が、3層上面から器台(5)が出土している。前者は方台部の崩落土と考えられる6・7層中からの出土で、後者も大分上位だが方台部からの流れ込みである2層中からの出土である。両者とも方台部からの転落と考えられる。

また、北西溝中央、東西コーナーでは、方台部からの流れ込みである2層下、周溝墓外からの流れ込みと考えられる3層上面から焼土が検出されている。上層から6世紀の土器群が出土し、それらが熱を受けていることを考えると周溝墓に直接伴うものでない可能性が高い。方台部における火を使用した儀礼の存在を示唆する可能性も考えてはおきたい。

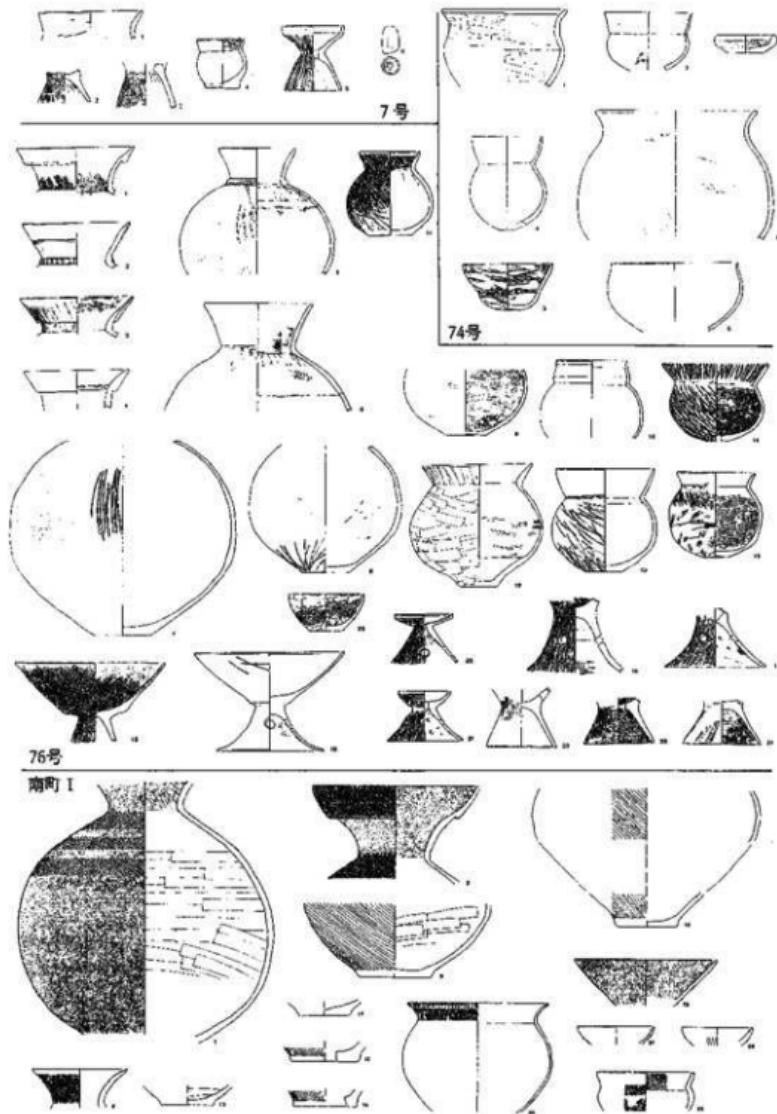
第12号周溝墓の状況については前述した。

第74号周溝墓は遺跡中で最大の規模のものである。方台部、南溝が調査区域外に当たり、全容は不明である。規模は東西で23.5mを測る。各周溝ともコーナーが浅く、中央が深くなる様相を呈し、深さは浅い部分で20cm、深い部分で40cmほどである。北溝中央に溝中土坑が認められる。

遺物は多く出土しているが、ほとんどが小破片で上層からの出土であり、本跡に伴うものか不明と言わざるを得ない。各周溝とも同様の状況を示すことから、これも一種の「廃棄」儀礼なのであろうか。図示できるものとしては、甕、台付甕、鉢、壺、ミニチュアが出土している。甕類以外には2次加熱痕は認められない。比較的残存率の高い3・4は東溝からの出土で、これも同様の出土状況を示している。

第76号周溝墓は、南西半部のみが調査されている。75号周溝墓と切り合い、本跡の方が新しい。規模は東西12.8mを測る。周溝はコーナーが浅く、中央部が深くなり、40~60cmの深さである。南溝の一段深く掘り込んだ部分を溝中土坑と見ることもできる。

図示可能な遺物は壺、小型壺、高杯、器台、鉢、甕、台付甕、土錘が出土している。甕類以外に



第17図 鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡の周溝墓出土土器
(西口1986、福田1987より改図転載)

も15の壺、16の高杯に焼が若干付着している。その他にもかなり多量の土器が出土している。図示可能土器の大部分は南溝の張り出し部、北西コーナー、南東コーナーを中心に出土している。南溝の土器群は、そのまとまりから中央と南東側の2群に分けられるが、相互に接合関係があり、加えて北西コーナーの一群や南東コーナーの一群との接合関係も認められる。また、出土層位もいずれも最上層の周溝墓外からの流れ込みと考えられる4層を中心であり、数個体を除きいずれも残存率が低い。これらのことから、この土器群は別の場所で使用され、破碎された後に、ほぼ一時期に「廃棄」されたものと考えられる。この「廃棄」が儀礼行為に当たるのかは断定できない。逆に残存率の高い土器（小型壺・広口壺・高杯・器台・鉢：11～15・19・21・22・33・34・40）は、その場に近い位置で使用されたか、あるいは別に片付けられた可能性がある。

また、方台部の崩落土、流れ込みと考えられる5・6・7層は炭化物・焼土粒子を含み、方台部上における火の使用を窺わせる。

V期 戸田市南町遺跡（福田1987）

南町遺跡は荒川左岸の自然堤防上、鍛冶谷・新田口遺跡の南約500mに位置する。周溝墓は2基検出されている。ここでは第1号周溝墓について見ることにしたい。

第1号周溝墓はその南半部が調査されている。規模は北東～南西方向で17.0mを測る。各周溝の深さは東溝50cm、南溝70cm、西溝1mで、段を伴って西→東方向で深くなっている。方台部からは3.5×1.0m、深さ5～10cmの不整梢円形の主体部が検出されている。

遺物は主体部から壺、周溝から壺、高杯、甕、台付甕等が出土している。壺類以外でも9、10、13～16、37、39は2次加熱痕が認められる。南西コーナー、南溝西半、南東コーナーに遺物が集中する傾向がある。南西コーナーでは、溝中土坑上層から1・9の壺、37の高杯が出土している。1は破碎されたと考えられる。これらが出土した3層中には、焼土・炭化物が含まれており、火を使用した儀礼の存在が窺われる。その際に1の壺を破碎したと考えることもできるだろう。この儀礼は溝中土坑に伴うものと考えられる。南溝西半のものは完形度が低く、そのほとんどが方台部からの流れ込みである1～3層から出土している。このことは鍛冶谷・新田口遺跡同様の「廃棄」が行われたことを示すものである。南東コーナーの土器群もほぼ同様の出土状況だが、2の壺は確認面直下から破碎された状態で出土し、埋没の最終段階で何らかの儀礼に伴い破碎されたものと考えられる。

4. 土器から見た周溝墓の儀礼

(1) 器種構成

全体的な土器の器種構成については、III期以前においては壺が卓越し、IV期以後ではそれに甕類、高杯、器台、小型壺、鉢が加わるようになる。これは伊藤敏行氏の指摘する東京湾西岸流域全体における傾向（伊藤1988P14）とほぼ合致すると思われる。

また、入西遺跡群においては所謂吉ヶ谷式の、下道添遺跡においては畿内系、東海地方西部系の、鍛冶谷・新田口遺跡においては東海地方東部、西部系の土器の影響を垣間見ることができる。これ

が各々の遺跡における死者儀礼総体の差異とどの程度対応関係があるかは更に検討を進めなければならない。

次に、3で見たそれぞれの儀礼行為の結果と考えられる現象における各器種の使用はどうであろうか。

まず、全体として壺の優位性は明らかである。特に方台部においては壺類（註5）の使用を基本とすると思われる。今回対象とした両地域においては高杯を中心とする所謂供獻形態の使用は顕在化していないようである。これに対して周溝ではⅢ期以前においては伊藤氏が指摘するように壺を中心とする貯藏形態が中心であり、IV・V期以後ではそれに加えて高杯、器台等の供獻形態、台付壺を中心とする煮沸形態が用いられる。ただし比企地域においては、やはり大型の壺をその組成の中心とし、かなりの量に達するのに対して、大宮台地南部では器種の多様化が顕著で、39号周溝墓のように壺を多く出土するものもあるが多くの場合はその中心とはならないよう、特にV期以降にその傾向が強い。差異が見られる。

次に所謂3種土器についてであるが、「下道添遺跡13号、鍛冶谷・新田口遺跡12・33・76号、中耕13・21・31～33・41・42・48・52号周溝墓」で見られる。数量的にはごく限られた遺構からの出土であり、限定されたセットであることが分かる。

(2) 変形行為

a 穿孔行為 Ⅰ期の小敷田遺跡では、3個体の土器（壺・甕・異形土器）にいずれも焼成後の外面からの穿孔が見られる。1号周溝墓の1はコーナー部で更に破碎され、6は溝中土坑から横転して、11号周溝墓の9は溝中土坑から横転して出土している。器種の限定は見られず、点数が少ないため出土位置もどこから出土するというように限定できるか不明である。

次に比企地域だが、Ⅱ期の代正寺遺跡では穿孔土器が1点（甕）認められる。また底部を欠失するものが数点あるが人為的な欠失かは判断できなかった。11号周溝墓の35は甕とされるものだが、焼成後外面から穿孔されたもので、甕ではない可能性が高い。ベッタリと煤が付着している。南東溝の外縁からの出土である。Ⅲ期の花影遺跡では3号周溝墓出土の無頸壺に焼成後の打ち欠きがみられるのみである。Ⅳ期の下道添遺跡では、5個体の土器（壺）に穿孔が見られる。9号周溝墓出土の1・2は、いずれも底部に焼成後の内面からの穿孔を受けている。また、6には焼成前の胴部穿孔が見られる。1は北西溝からの出土で、周溝外からもたらされたか、埋没が進んだ段階で置かれたものと考えられる。2は北東溝の中央の溝中土坑上層の土器群中の1個体である。13号周溝墓出土の3個体はいずれも焼成前穿孔である。この内2個体は二重口縁を持ち、1個体は素口縁である。これらはいずれも南西溝からの出土で、周溝がある程度埋没した後他の壺、器台、高杯、鉢と共に一括して置かれたものと考えられる。V期の下道添遺跡では、方形周溝墓における穿孔土器は見出せない。IV・V期の中耕遺跡では今回取り上げた遺構内で22個体に焼成後の穿孔が、7個体に底部の欠損が認められる。周溝墓の全個体に施すものもあれば、全く施されないものもある。これらは32号周溝墓の5・6を除き、いずれも内面から穿孔されている。その他の周溝墓出土の穿孔土器も5・6例を除き内側からの穿孔である。13号周溝墓の10には焼成前に胴部の穿孔が見られ、今

回取り上げなかつたが、42号周溝墓、44号周溝墓出土のものにも小型壺に同様の穿孔が見られる。器種はほとんどが壺もしくは小型壺であり、それ以外に若干の鉢がある。周溝墓中における穿孔土器を持つ遺構の比率としては、今回調査された68基中図示可能な遺物が出土しているものが57基、その中で28基で約半数である。四隅切れのものでは38基中19基に、全周もしくは陸橋部を周溝中の1箇所に持つものは11基中5基の約半数に、盛土を有するものは全てに見られる。1周溝墓における出土土器中の壺・小型壺穿孔比率は、四隅切れの形態を持つものでは9号周溝墓のように全個体に施すものもあるが、今回取り上げたものでは約半数のものに施されるのが標準的で、その他は1個体のみで1割から2割にしか当たらないものも多い。全周する形態のものでは、今回取り上げた13号周溝墓で約6割が施されているがその他のものも率が高い。盛土の遺存しているものでは、今回取り上げた21号で約半数の土器に、41号では約1割、42号では約3割に施されている。出土状況は一律でない。今回取り上げたものだけでも、周溝の底面に置かれるもの、埋没途中に置かれるもの、流れ込みがあり、その他の周溝墓でもこれらに加え方台部から転落するもの、周溝墓外から転落するものが認められる。この内四隅切れのものでは全ての状況が認められるのに対して、全周もしくは1箇所にブリッジを持つものには転落したものが多い。盛土の残るものでは周溝底に置かれている。伴出関係は各器種と共に出土しているが、特に注目されるのは9号周溝墓の溝中土坑や、21号周溝墓南溝の一群のように穿孔壺のみ別に取り扱う場合があることである。また、13・41号周溝墓における木製品との伴出は特筆されるものである。

次に大宮台地南部地域について見ることにしよう。II期の明花向遺跡においては穿孔が施された土器は見出せない。しかし、それがこの時期における穿孔行為の不在を表すものではないことは川口市小谷場台遺跡(第13図)のほぼ同時期の周溝墓中から底部穿孔壺、底部を打ち欠いた壺が出土していることからも明らかである。III期の鍛冶谷・新田口遺跡では、2個体にいずれも焼成後の外側からの穿孔が施されている。南溝の方台部からの崩落土の上から横転した状態で出土している。IV・V期の鍛冶谷・新田口遺跡では今回取り上げたものの中では穿孔行為は認められなかった。また、それ以外の周溝墓においても6点のみで、全体の器形が窺えるものは13号周溝墓、17号周溝墓、戸田市教育委員会第VI次調査の1号周溝墓出土のものに限られる。その他は底部のみの破片である。出土状況は13号周溝墓で底部が外れた状態の壺が南コーナー中層から横転した状態で出土し、底部は別に周溝底から出土している。このことは穿孔処理後の底部を別に取り扱う場合があることを示している。17号周溝墓では西側ブリッジ周辺にある溝中土坑上層から、VI次1号周溝墓では南溝中央の底面から横倒しの状態で壺が出土している。V期の南町I遺跡では、南溝の南東コーナー周辺の中層から底部穿孔を施した底部のみが3点出土している。これも前述した鍛冶谷・新田口遺跡13号周溝墓同様の底部の扱いを示すものと思われる。

ここで、穿孔行為についてまとめてみると、まずI～V期の継続性については問題ないであろう。比企、大宮台地南部の双方に共通する周溝墓での行為として認めることができる。問題はその実施法である。I期の小敷田遺跡における様相は、器種も限定されず、コーナー部での破碎や溝中土坑への埋納がみられるが、これを模形とするならばII期以後の両地域における展開は、明らかに異なる道筋をたどっている。II・III期の比企地域では、穿孔行為自体が重きが置かれているとは言い難

い状況である。これに対して、大宮台地南部では小谷場遺跡や鍛冶谷・新田口遺跡61号周溝墓が示すように、壺の穿孔行為が周溝墓における儀礼の一部であったことは確実である。IV・V期における様相も対照的である。下道添遺跡で焼成前後の穿孔が見られ、中耕遺跡で約半数の遺構の多くの土器に穿孔が見られるのに対して、鍛冶谷・新田口遺跡における全形が窓える土器に対する穿孔行為は余りにも貧弱である。焼成前穿孔も見られない。両地域は明らかに異なる変遷の過程をたどっているのである。

上述のように、穿孔土器についてまとめて来たわけだが、これを伊藤氏の成果と比較してみよう。

伊藤氏は、「穿孔」や「欠損」といった土器の変形行為が「特定の遺構」にのみ認められることを指摘している（伊藤1988 P15）。本稿におけるII・III期の様相はその指摘と同様であることを示しているが、両地域の様相からはその普遍性にかなりの差異があることが明らかであり、「特定の遺構」という言葉のみでは括り切れない複雑さが窓える。IV・V期も大宮台地南部における様相はその指摘の妥当性を示すものである。問題となるのはIV・V期の中耕遺跡である。前述のように約半数の周溝墓から出土している。それまで主体的でなかった地域内にこの儀礼行為が取り入れられた結果、本来的に穿孔土器を用いる儀礼を行える特定の実施可能者に限らず、極度に肥大化した死者儀礼として発達した例と考えられる。

次に伊藤氏は本稿におけるIV期以後、弥生時代中期から継続する「穿孔土器」と新たにもたらされた「三種土器」は原則的に共伴せず、別々のものとして取り扱われること、両者が共伴するものは「きわめて有力な基」に限られることを指摘している（同P15）。

「穿孔土器」と「三種土器」の共伴関係は、大宮台地南部が皆無であるのに対して、比企地域では下道添遺跡13号墓や中耕遺跡13・21・31・32・41・52号の各周溝墓で見られる。これはもちろん穿孔土器の出土率とも関係するので一概には言えないが、3種土器を用いた儀礼という新たな体系を受け入れ、加えて穿孔土器を用いることが普遍的でなかった地域が、それらを規範が外れた状態で受容した為に、伴出例が多くなったものと考えられる。

b 破碎行為 I期の小敷田遺跡では2個体の土器（壺）が破碎されて出土している。いずれも南東溝の立ち上がり底面からの出土で、1個体は自然縫で破碎された状態である。

次に比企地域だが、II期の代正寺遺跡では破碎したと考えられるものは1個体（壺）のみである。10号周溝墓10は北東溝の東コーナー近くで周溝埋没から一定期間後に破碎されている。III期の花影遺跡では破碎行為は見られなかった。IV期の下道添遺跡では、破碎行為の可能性のあるものもあるが断定はできない。V期の下道添遺跡の方形周溝墓では、破碎行為は見出せない。IV・V期の中耕遺跡では、実測可能な遺物が出土した57基中20基の約4割に認められる。四隅切れのものでは38基中12基の約3割、全局するものでは11基中7基の約6割、盛土が遺存するものでは3基中1基に認められる。器種は壺が中心だが、その他の器種も多く見られる。出土状況は溝底、中層、上層、確認面で見られる。58号周溝墓のように完形の土器群と共に出土するものもある。

大宮台地南部のII・III期ではあまり様相が明らかでないが、主体的な行為とは位置付けがたいようである。この地域で破碎行為が顕在化するのはIV期以後である。特に鍛冶谷・新田口遺跡におけ

る様相は特徴的である。今回取り上げたものでも86号周溝墓を筆頭に各周溝墓で見ることができる。統じて器種は限定されず、上・中層における破片が多く、陸橋部、コーナーに集中して出土する傾向が見られる。21・27・33号周溝墓においては、86・74・76号周溝墓と同様の出土状況が認められ、方台部における破碎と周溝への廃棄が考えられる。また、31・35号周溝墓では、ブリッジ方向からの上・中層への廃棄と考えられる状況が見られる。12号周溝墓のブリッジ東側の3群としたものは、大型の壺を周溝底において粉々に破碎したものである。この壺の破片は8号周溝墓の出土土器と接合関係にあり、両者の儀礼行為の同時性と共に破片を分ける場合があったことを示すものである。

この状況は鍛冶谷・新田口遺跡に留まるものではなく、南町I遺跡においても見られる。また、南西コーナーでは溝中土坑上層から壺が破碎されて出土している。前述したが、火を使用した儀礼の存在も窺える。また南東コーナーの確認面直下でも壺の上半が粉々に破碎された状態で出土している。

同様の状況は荒川低地一帯に見られる可能性があり、下流の東京都北区豊島馬場遺跡（小林・中島1993）でも同様の出土状況を示している。

I期にその祖形があると考えられる破碎行為だが、II・III期においては両地域であまり見ることができず、主体的な行為とは位置付けがたい。破碎行為が顕在化するはIV・V期以後である。比企地域においては、前述したように壺を中心に行われている。注目すべきは周溝底、中層、上層の各層位での破碎行為が見られることであり、破碎を行う儀礼の複次性を示すものと考えられる。大宮台地南部における様相は前述したように特徴的である。両者を比較した場合、周溝内の状況からは、比企地域が完形の土器を重視し「造棄」しているのに対して、大宮台地南部は徹底した破碎を行い「廃棄」している。これが何に起因するかは更に検討しなければならないが、明らかな差異と見ることができる。

次に3で見た穿孔行為との関係だが、I期においては両者が同一周溝墓中で共存している例が見られる。II・III期においては共存関係は不明である。比企地域のIV・V期は中耕遺跡において破碎土器を出土した20基中穿孔土器を出土したのは10・12・17・28・41・52・58号の7基しか認められない。また、大宮台地南部においては鍛冶谷・新田口遺跡37号周溝墓、南町I遺跡1号周溝墓で認められるのみである。このことは「穿孔」「破碎」の両行為が、「破壊」という意味では同じものの区別して行われていたことを示すものである。

次に3種土器との関係だが、中耕遺跡においては27・41・52号において認められる。鍛冶谷・新田口遺跡においては12・33・76号周溝墓において認められる。「破碎」行為を行う周溝墓全体の中ではごく僅かでしかない。このことは三種土器がそろう確率の低いこともあるが、それでも3種土器を用いる儀礼と「破碎」行為を行う儀礼が、原則的に区別されていたことを示すものである。

ここで、穿孔・破碎土器についてまとめた山岸氏の「穿孔土器論素描」（山岸1989）における成果と比較してみよう。長くなるが比較のため、まとめの部分を引用しておきたい。

〔第1段階〕（弥生時代中期～後期中葉：福田註）

- ・穿孔土器と破碎土器の数量的差異はない。・穿孔は焼成後で、外側からの穿孔が主体。・穿孔、破碎部位は底部中心だが、他の部分胴部、肩部、口縁部も多い。・器形は壺形土器が多いが他の器

形もある。・朱塗、赤彩を伴う。・溝内出土の場合、溝底密着か直上が多い。溝中央部が多い。・1基につき1～2個体に過ぎない。・1遺跡内でこの種の土器を伴う周溝墓の比率はかなり低い。

(歳土遺跡25基中5基、寺崎遺跡43基中2基)

[第2段階] (弥生時代後期中葉～古墳時代前期初頭：福田註)

・穿孔土器が主となり、破碎土器の比率は下がる。・穿孔は焼成後と焼成前が混在するが、主体は焼成後。・穿孔の仕方は前段階に比べて丁寧で、内より穿孔する例が目立つ。・穿孔部位はほとんど底部で、他の部位は極減する。器形は壺形土器が大多数である。・溝内出土の場合、溝底より浮いているケースが多い。・溝のコーナー付近及び端部付近での例多い。・1基1個体か、1溝1個体が普通。・一遺跡でこの種の土器を伴う周溝墓の比率は相変わらず低い（例、鍛冶谷・新田口遺跡95基中5基）。・外來系の底部穿孔土器二重口縁壺形土器が出現。

[第3段階] (古墳時代前期：福田註)

・穿孔土器が大多数。・故意に底部や口縁部が別々の地点に廃棄する例があり。・穿孔は焼成前が主、焼成後でも孔付近を研磨。・穿孔部位は底部。・器形は丁寧なつくりの朱塗赤彩壺形土器。・一遺跡内で特殊な周溝墓からまとまって出土の場合多い。溝内出土の場合、溝底よりかなり浮いて発見される。・溝内の各所で検出され位置の偏在性はない。・一遺跡内でこの種の土器を伴う周溝墓の比率は第1段階と同じ位（例、神谷原遺跡19基中3～4基）】（P120上113～同下120）

まずⅠ期については、山岸氏は触れていない。Ⅱ期は山岸氏の第1段階に当たる。まず比企地域の代正寺遺跡では、焼成後であることや穿孔部位、器種、穿孔方向については共通するが、赤彩が施されず、周溝中層からの出土である点は相違する。また、穿孔土器と破碎土器は各1点のみの出土で数量的な比較には耐えない。大宮台地南部の明花向遺跡では穿孔行為が見られず、同時期の小谷場台遺跡では单一の周溝墓から、外側から底部穿孔された壺と底部付近を打ち欠いた壺が各1点出土しているが、破碎されたものは見られない。前述したように、本稿で対象とする両地域はⅡ期における良好な例が少なく、加えて穿孔行為自体も普遍的とは言い難い。破碎行為についても同様である。山岸氏の成果との比較は難しい。

Ⅲ・Ⅳ期は山岸氏の第2段階に当たる。Ⅲ期については前述のようにあまり様相は明らかでないが、穿孔土器の出土比率や穿孔方向に相違が見られる。Ⅳ期における比企地域では、焼成前後やその方法、部位、器種については合致するが、出土層位は周溝底、中層、上層があり、出土位置も溝中土坑中や周溝中央から出土するものも多い。1周溝墓当たりの個体数は複数例が多くあり、遺構に対する出土数は、中耕遺跡ではかなり高い。大宮台地南部の穿孔土器と破碎土器の比率は、破碎土器の方が圧倒的な比率を占める。溝中土坑上層や周溝底から出土するものもある。Ⅴ期における両地域の様相は基本的にⅣ期の様相と変わらないが、下道添遺跡13号周溝墓や中耕遺跡の盛上遺存のものには共通する要素が多い。だが、出土層位等については違いが見られる。

これらの相違は何を意味するのだろうか。もち論、全体的な流れとしては山岸氏の成果と概ね合致している。これらの相違が地域性を表す可能性も充分に考えられる。しかし、幾つかの点での違いは見逃すことができない。特に出土層位やその状況、1遺構当たりの出土率や破碎行為との関係に相違があることは重要である。出土層位は、転落と考えられない場合には穿孔行為が行われ、そ

それが周溝にもたらされた時点を示すものと考えられる。この両地域における様相は穿孔土器が方台部からの「転落」という現象のみに単純化できないことを雄弁に物語っている。山岸氏は「供獻土器論－穿孔土器を中心に－」(山岸1990)において、周溝墓出土の土器群は「方台部に据置されていた土器が後日崩落した」(P135 123・24)とその原因を一元化しているが、本稿で見たように「転落」のみにその要因を求めようとする単純な見解は妥当でないと考えられる。破碎行為についても「精緻に穿孔されなかった土器が破碎土器になった」(同P135 17・18)としているが、同様に妥当でないと考えられる。前述したように「穿孔」行為と「破碎」行為は区別された別の儀礼的行為と考えられる。穿孔土器の失敗が破碎土器であるとするならば、中耕遺跡や鍛冶谷・新田口遺跡、南町I遺跡に見られる多器種の破碎行為や多様な出土状況が示す「破碎行為」をいかに理解するのであろうか。また、穿孔土器と破碎土器との非共伴が示すように、失敗した個体のみをわざわざ残すのであろうか。これらのことを見解するのに、「失敗」を前提にする方が不自然でしかも難しい。

(5) 述べるが穿孔と破碎はレベルの違う別の行為と考えた方が自然なのではないだろうか。

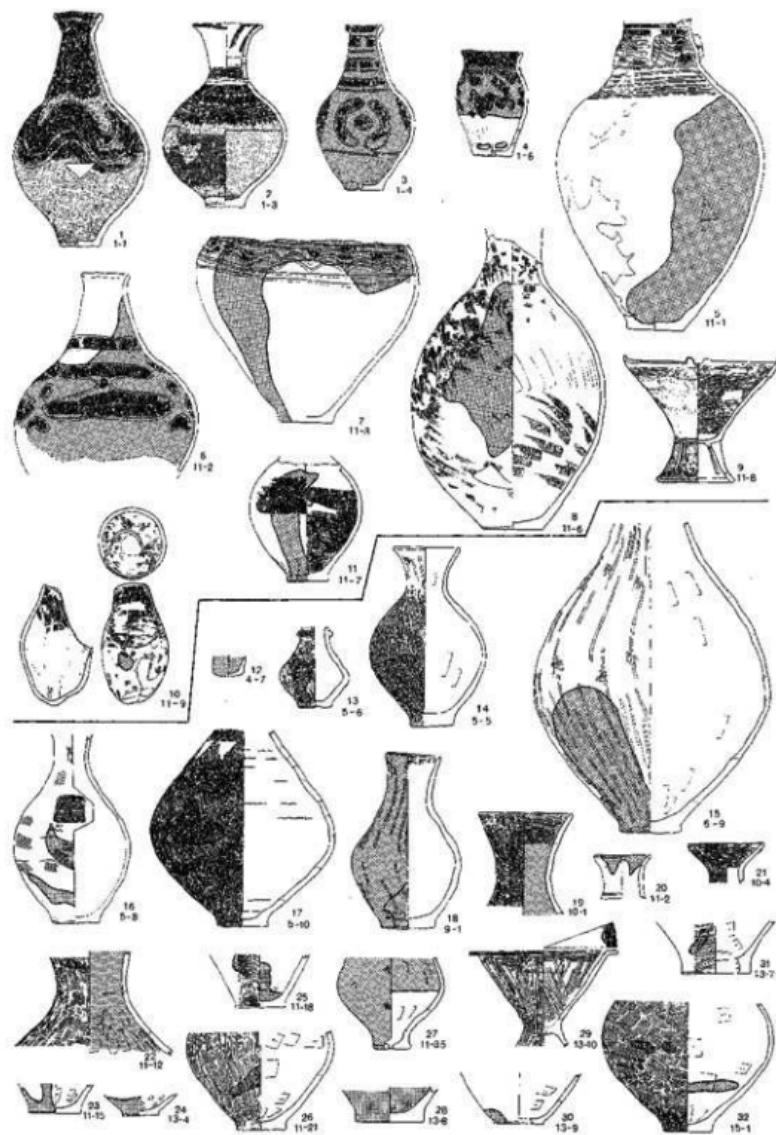
また、岩松保氏は、畿内の例を中心とした中土坑=溝中埋葬という理解の下、方台部では完形土器を用いた儀礼が、周溝では破碎土器を用いた儀礼が行われたとし、両者を階層差によるものとしている(岩松1992)。本稿における対象地域の様相からは、岩松氏の見解は首肯できないものである。

(3) 加熱行為

3で見たように、周溝墓出土土器の中には壺、台付壺等の所謂煮沸形態以外の土器にも2次加熱を受けているものが見られた。

I期の小敷田遺跡では、壺、高杯、異形土器に2次加熱痕が見られる。特に11号周溝墓の出土土器は全てに認められる。本周溝墓群に対応すると考えられる集落跡は小敷田、池上(中島宏ほか1984)、池上西(宮1983)で検出されているが、小敷田遺跡1・3・8・11・13・14・16号住居跡、44・79・198・205号土坑で壺に2次加熱の痕跡が見られる。このことは壺にも加熱行為が行われる場合があったことを明瞭に示している。従ってこれらの土器群の内、壺については周溝墓における儀礼的行為の結果として2次加熱を受けたものとわかるには判断し難い。高杯・異形土器にその可能性がある。これらの土器の2次加熱の部位については第18図に示したが、煮沸行為に伴うような激しい加熱痕は認められず、壺以外で器面の全面にわたるものも認められなかった。このことは、この火を用いる行為がごく少ない回数のものであったこと、ある方向に存在する火から熱を受けていることを示している。火を使用する儀礼の際に、これらが火の近傍にあった結果と考えられる。

II期の比企地域の代正寺遺跡では、壺、高杯、ミニチュアに2次加熱痕が認められる。対応する集落跡も調査されているが、13・16・46・72号住居跡の壺各1点に煤の付着が認められるのみで2次加熱の痕跡は見出せない。従って、これらの土器群の2次加熱痕跡は、壺に転用の可能性があるが周溝墓における儀礼的行為の結果と考えられる。2次加熱の部位等については第18図に示したが、ほとんどの個体は煤が付着する程度のものであった。その一方で少数例ながら、激しい2次加熱痕を受けるものも存在する。18や19・22・27は器面の赤変や濃い煤の付着が認められる。このことは、2次加熱行為に軽微なものと、土器を火にかける程の強いものとがあったことを示している。これ



第18図 2次加熱を受けた土器(1) (各報告書より改図板載)
(下段は遺構 No と図版 No、網かけ部分被熱)

らの激しい2次加熱の痕跡は煮沸行為の結果とも考えられるが、内面に炭化物が付着するものが少ないとから、その可能性は低いと思われる。また、出土状況は方台部からの流れ込み、転落と考えられるものが多いが、周溝底面や確認面から出土するもの、外周からもたらされた可能性がある土器群も認められ、土器を用いる各々の行為において火が使用されていたことが分かる。

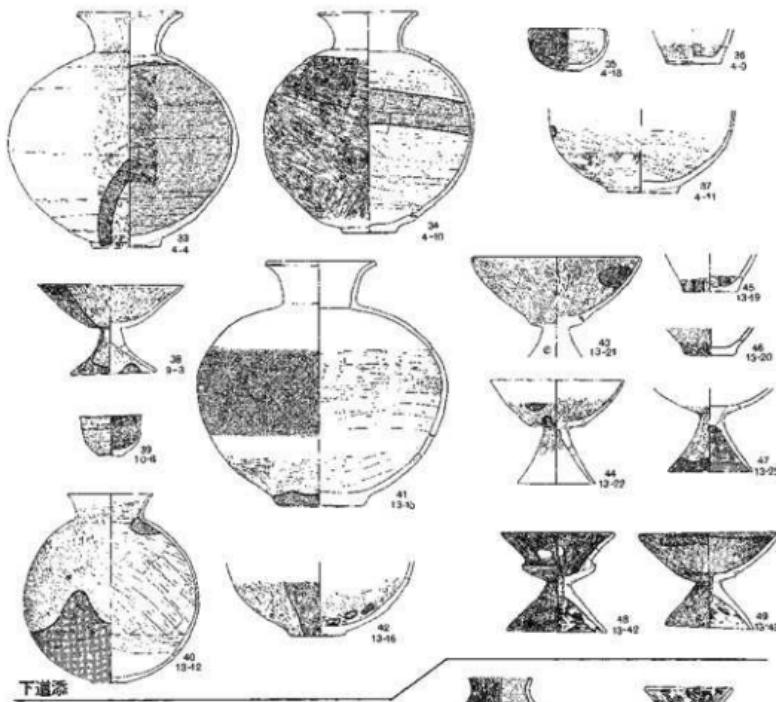
Ⅲ期の花影遺跡においては、2次加熱を受ける土器は出土しておらず、加熱行為の有無は不明である。

IV・V期の下道添遺跡では壺、碗、装飾器台、高杯に2次加熱痕が見られる。下道添遺跡では時期はやや遅るが集落部分も調査されている。そこでは煮沸形態以外の壺・高杯の数例に2次加熱痕が認められるが、大部分のものにはその痕跡はない。従って、これらの土器群は周溝墓における儀礼的行為の結果と考えられる。2次加熱の部位等については第19図で示した。大部分が一部に煤が付着する程度の軽微なものが、47のように、煤の濃い付着が見られるほど強い火を受けるものがある。これはII期に認められた火を使用する行為の強弱を示すものと同様のものと考えられる。器種が高杯であることから、煮沸行為に用いられたとは考え難い。また壺の内面に煤の付着が認められるものがあるが、ごくわずかであり、煮沸行為に用いられたものとにわかつには判断しがたい。次に出土状況については、これらが1箇所にまとめられているような様相は見られない。方台部から転落したもの、埋没途中に中層に置かれたもの、溝中土坑上層に置かれたもの、周溝外周のテラスから転落したもの等が見られ、土器を使用する各々の行為において火を使用していたことが分かる。

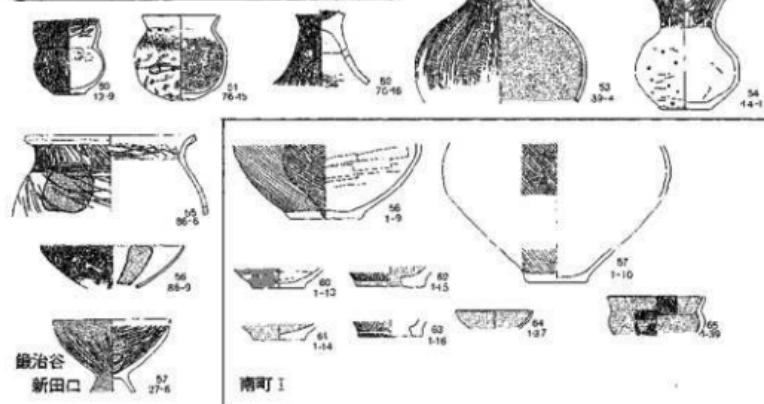
IV・V期の中耕遺跡では壺、高杯、器台、装飾器台、鉢、脚付鉢に2次加熱痕が見られる。中耕遺跡では、周溝墓群より1段階時期が古いが集落部分も調査されている。壺・高杯・器台・鉢に2次加熱を受けているものが見られるが、火災にあってると考えられる住居が多いことから、この行為が一概に一般的であったとは言えないだろう。火災にあっていない住居出土のものは壺、高杯に2次加熱を受けているものが多く認められる。従って、壺、高杯については転用された可能性を考えれば、そのまま儀礼的行為の結果とすることはできないだろう。それ以外の器台、装飾器台、鉢、脚付鉢が火を用いる儀礼的行為の結果、2次加熱を受けたものと考えられる。実見していないため2次加熱の強弱については不明である。出土状況は、方台部から転落したもの、溝底に置かれるもの、埋没途中で置かれるものというように、土器を使用する各々の行為において火を使用していったことが分かる。

大宮台地南部ではII期の明花向遺跡・小谷場台遺跡では認められない。III期の銀治谷・新田口遺跡においても同様である。また同時期の浦和市井沼方遺跡等においても認められず、当地域においてはII・III期では土器を火を使用する儀礼に用いることが一般的ではなかったと思われる。

IV期の銀治谷・新田口遺跡では壺、広口壺、高杯に2次加熱痕が見られる。同時期の集落は検出されておらず、これらが儀礼的行為の結果として2次加熱を受けたのかは断定できない。同時期の浦和市本村遺跡第3号住居跡（柳田・山田1987）では、壺に煤の付着が見られ、壺が火を受ける場合があったことが分かる。従って壺は除外しておきたい。2次加熱を受ける部位は第19図に示した。これらはかなり強い火を受け、煤の付着、器面の赤変が著しい。広口壺・高杯はいずれも86号周溝



下道添



南町 I

第19図 2次加熱を受けた土器(2) (各報告書より改図転載)

墓出土のもので、前者が跡橋部上層、後者が東溝上層から「廃棄」された状態で出土している。

V期の銀治谷・新田口遺跡では高杯・小型壺に2次加熱痕が認められる。V期の集落は周溝墓群より後出であるが調査されており、器台のみに煤の付着が認められる。従ってこの高杯・小型壺は儀礼的行為の結果として2次加熱を受けたものと考えていいだろう。これらは若干煤が付着するのみでごく軽く、恐らく1回のみ火を受けたものと考えられる。12号周溝墓出土の50は東溝の確認面直下から壺、広口壺、小型壺、椀、甕、台付壺と共に一括して出土している。27号周溝墓出土の57は、中層から上層にかけての鉢、壺、器台の多量の破片と共に出土している。また、市教育委員会の第V次調査1号周溝墓出土の高杯にも2次加熱痕が認められる。東溝のほぼ周溝底からの出土である。このことは、これらの土器を使用する様相が異なり、その異なる各々の場面において火を用いていたことを示すものと思われる。

V期の南町I遺跡では、壺・高杯・小型高杯・椀に2次加熱痕が認められる。この時期の集落は検出されていないが、銀治谷・新田口遺跡や隣接する上戸田本村遺跡（塩野1981）の住居跡出土の土器の様相を勘案すると、これらは周溝墓における儀礼的行為の結果2次加熱を受けたものと考えられる。加熱部位については第19図に示したが、57・60の煤が薄く付着する程度の加熱の弱いものと、56・61～64の煤が濃く付着する、あるいは器面が赤変する程の加熱の強いものがある。これは前述のような行為の強弱を示すものと言えよう。57の壺は主体部からの出土で、方台部主体の埋葬儀礼に伴う火の使用を実証するものである。また、前述したように56～64は溝中土坑に伴う儀礼行為を示す可能性がある。62・63の穿孔された壺の底部に2次加熱痕が認められるが、穿孔部分は2次加熱を受けておらず、加熱→穿孔の順を知ることができる。これらは方台部からの廃棄である。これらの状況は、土器を用いる各々の儀礼行為の際に火を用いることを示している。

ここまで、土器に見られる加熱行為について見て来た訳だが、その様相をまとめてみよう。まず、比企地域ではIII期には認められないが、おそらくII～V期にかけて継続して火を使用する儀礼の際に土器を用いていたものと思われる。器種は壺、高杯、器台、椀、装飾器台、ミニチュア、鉢、脚付鉢が見られ、数量的にもどれかが突出するということはないようである。このことはこの火の使用の目的が煮沸にあるのではなく、土器に火が当たること自体を問題にしたか、あるいは偶然に火が当たったものと考えられる。その一方で加熱の強弱も見られ、行為が複数次に及ぶか、火そのものとの関係が異なる儀礼の様相を表しているものと考えられる。また、出土状況も多様であり、土器を用いる儀礼の各々の場面の多くで火が共に使用されていたことが分かる。

大宮台地南部では、II・III期の様相が明らかでない。これは検出遺構の少なさもあるのだろうが、土器を用いる儀礼の際に火が使用されなかった可能性を示している。比企地域とは対照的である。IV期になって初めて2次加熱の痕跡を持つ土器が見られる。器種も広口壺、高杯で、両者が強い加熱を受けているが、煮沸にその目的があるのではないと思われる。出土状況は「廃棄」であり、比企地域とは異なっている。V期では、数量的にも多く見られるようになる。器種も壺・小型壺・高杯・小型高杯・椀と多種にわたる。加熱の様相にも強弱が見られ、出土位置や層位、状況も多様であり、土器を用いる各々の場面で火が共に使用されることを示している。

このように、比企地域と大宮台地南部ではかなり様相が異なり、V期に至ってある程度土器を火

に当てる行為が共通するようになる。

さて、比企地域におけるII期の加熱行為は果してI期から継続するものなのであろうか。I期における小敷田遺跡の様相について春成秀爾氏は、「関東地方在来の再葬墓が、西日本から伝來した方形埴丘墓の内部主体として採用されている可能性」(春成1993P52下16~17)を考えている。再葬墓において2次埋葬容器としての壺に2次加熱が認められる場合があることはよく知られている。ここで、春成氏の主張(再葬行為の有無)の是非について問う用意はなく、慎重な態度が望まれるのであろうが、この行為が周溝墓という墓制に伴うものなのかはここで明らかにしておかねばならない。2次加熱を受けるものの内、確実に周溝墓における行為の結果と考えられるものが高杯、異形土器に限られる現段階においては、それら自体から解答を導き出すことは難しい。では、他の様相からはどうであろうか。2で述べたように、小敷田遺跡の出土土器は①器種が多器種にわたること、②出土位置が土坑内にとどまらないこと、③方台部から転落したと考えられるものがあることから、既に周溝墓の外形だけでなく、その死者儀礼行為自体も受容していることが明らかである。従って、この行為が再葬墓という墓制から単純に引き継いだものではなく、周溝墓という墓制の中に取り込まれていると考えができる。結果として、春成氏の見解と同様にはなるが、再葬の継続性とそれに伴う儀礼行為の残存ではなく、既に周溝墓という墓制における行為の一部であるという点を強調しておきたい。従って、II期の比企地方の様相も周溝墓の行為としてI期から引き継いだものと考えられる。

周溝墓における土器の加熱行為について、まとまった考えを明らかにしているのは大庭重信氏のみであろう(大庭1992)。

大庭氏はまず、集落出土の土器群と周溝墓(埴基)出土の土器群を比較し、その中でも広口壺A・C・Dが特に周溝墓で使用する土器として選ばれ、それらが集落出土のものに対して焼が高率で付着することから、その用途を葬送儀礼における煮沸行為と推定した。本稿における土器群は、(1)で見たように集落出土土器群と比して特徴的に多く出土する器種は原則として存在しないようである。入西遺跡群で見られる直口縁の壺もそれ以外の壺同様の取り扱いを受けているようで、ここで見たように煮沸行為について特徴的に用いられている様相は見られない。従って本稿において対象とした両地域における周溝墓出土の土器群について、「火にかける」という用途に適した器種が選ばれて用いられ」(P9316)るようなことはなかったと考えられる。加えてI~III期の壺類の使用における優位性は明らかである。これは大庭氏が述べるように、近江・東海以東に共通するものであり(P107)、畿内とは異なる儀礼形態の結果と考えられる。本稿で扱った両地域では、IV期以後各器種が2次加熱を受ける場合があるが、それでも壺類が中心で畿内地方のように壺が全体の半数を占めるという様相は見られない。特定器種が高率を示すようなこともない。出土器種の多様化は(1)で述べたが、それがそのまま畿内的な儀礼様相への変化を意味するものでないことは明らかである。集落出土の土器も含めて、畿内化が声高に言われるこの時期だが、まだ根強い地域色があることは明らかである。

次に火を用いる行為自体についてはどうであろうか。既にその行為の目的が「煮沸」にないことについては述べた。本稿における検討では、土器を火にかける事自体が問題になっていること、加

熱行為の強弱が見られることが明らかになった。また多様な出土状況から、前述したように土器を用いる儀礼の各々において火が使用されることが明らかである。大庭氏は「煮沸行為」が、方台部の複数主体の埋葬毎に行われたと複数回の行為を推定しているが、「埋葬」自体は別として複数次の使用という点では共通する。

IV期以後においては、南町I遺跡の様相から加熱行為の後に穿孔行為を受けていることが明らかである。この点については共通する。穿孔・破碎行為を大庭氏は「煮沸」という実用の後「けがれ」を払うために行う実用否定の行為としているが、この点については(5)で述べたい。

(4) 出土状況から見た儀礼の様相と変遷

(3)まで、方形周溝墓出土土器のありかたについて検討して来た。ここではそれらの成果と3で見た出土状況を合わせて、両地域における儀礼の様相と変遷を整理してみよう。(表2~4)

表2・3はI期の小敷田遺跡とII期以後の比企地域の様相をまとめたものである。この表からは次のことが窺える。まず継続性についてである。方台部における一連の行為はII期、あるいはI期からV期まで継続して行われている。特に不明な点が多いIII期においても、土器の遺棄行為は確実に行われている。周溝においても、特定の周溝から出土する傾向、即ち儀礼の中心となる方向の存在もIII期から見られる。また、III期の様相は不明だが、入口部における儀礼的行為についても継続して行われている可能性がある。溝底に土器を据え置く行為、埋没途中に土器を用いる儀礼、周溝外における儀礼行為も同様である。

次に新出性である。III期の様相が不明瞭なため断定はできないが、IV期以降の儀礼的行為の大幅な増大は目を見張るものがある。特に溝底、中層、確認面における土器の遺棄行為は儀礼の複次性を示すものとして見逃すことができない。(2)で述べたように土器の変形行為にも多様な様相が認められる。木製品や朱の存在も特筆されるが、これは遺物の質的問題や方台部の喪失によりこの時期からの出現を断定はできないだろう。

大宮台地南部の様相については表4にまとめた。この表からは儀礼行為の途絶と新出について以下のことが考えられる。周溝における埋没途中に土器を置く行為はIII期までしか認められない。コーナー底面に土器を置く行為はIV期のみのものである。これらの「置く」行為に対してIV期からは周溝上層に対する廃棄が見られるようになる。これにはコーナーに集中するものや周溝全体に及ぶものがある。溝中土坑の底面・上層に土器を置く行為、ブリッジ際に土器を置く行為もこの時期から見られるものである。特に鍛冶谷・新田口遺跡12号周溝墓における儀礼の複次性はこの時期における儀礼の複雑化を端的に示すものである。II・III期の資料の不十分さを勘案しても、これを変化として捉えることは妥当と思われる。

また、V期の南町I遺跡における壺の出土を単純に副葬と判断し得るかは別問題だが、この壺の出土という状況は方台部遺存の周溝墓が皆無である以上、この時期に始まるものとは断定し難い。更に類例を持つ必要があるが遡る可能性があるだろう。

比企地域、大宮台地南部地域の周溝墓における儀礼的行為の流れを見て来たわけだが、ここで両者を比較してみよう。まず、方台部における行為については両者とも共通してII期から継続する。

表2 出土状況からみた儀礼の様相(1) 一小畠田・比企1号

遺跡名	方台部	周溝	溝中土坑
小畠田 (I期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への完形土器(壺)の転落 ↓ 完形土器(壺)の遺棄行為 ・周溝へ焼土、炭化物が流れ込む * 火を使用する儀礼 	<ul style="list-style-type: none"> 出入口部で土器(壺)を疊によつて破砕 周溝底に土器を置く 土器(高杯、異形土器)を火を使用する儀礼に用いる 	完形の土器を埋納する
比企地域 代正寺 (II期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器(壺)の転落 ↓ 土器(壺)の遺棄行為 ・周溝へ焼土、炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼 	<ul style="list-style-type: none"> ・陸橋部際底面からの完形土器(壺)の出土 ↓ 入り口部の儀礼の存在 ・埋没途中で土器(壺)を破碎 ・周溝底に土器を置く ・周溝外周から土器(壺・壷)が転落? ↓ 周溝外における儀礼の可能性 	
花影 (III期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器(壺)の転落 ↓ 土器(壺)の遺棄行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の周溝に集中して出土 ↓ 儀礼の中心となる方向の存在 	
下道添 (IV期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器(壺等)の流れ込み・転落 ↓ 土器(壺等)の遺棄行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・埋没途中で多くの土器(壺・器台・高杯・鉢)を置く 	<ul style="list-style-type: none"> ・上層からの土器の出土 ↓ 儀礼に使用?
下道添 (V期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器(壺・小型壺)の転落 ↓ 土器(壺・小型壺)の遺棄行為 ・方台部上で破碎・破損したものが周溝に流れ込む ↓ 破碎行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝外周のテラスに土器が置かれる ・テラス側で火を用いた儀礼が行われる 	
中耕四隅切 (IV~V期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器(壺・台付壺)の転落 ↓ 土器(壺・台付壺)の遺棄行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・陸橋部際底面での土器(台付壺)の破砕 ・周溝底に土器(壺・小型壺・器台・高杯)を置く 	・土坑内に壺を納めた可能性

表3 出土状況からみた儀礼の様相(2) 一比企2-

遺跡名	形態	方台部	周溝	溝中土坑
中耕 (IV~V期)	四隅切	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝へ焼土、炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼の存在 	<ul style="list-style-type: none"> ・溝底で土器（壺）を破碎 ・埋没途中で土器（壺・器台・高杯）を置く ・埋没途中で土器（壺）を破碎 ・確認面直下の土器（壺）の遺棄 ・特定の周溝に集中して出土 ↓ 儀礼の中心となる方向の存在 	
	全周	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器（壺・小型壺・鉢）の流れ込み ↓ 土器（壺・小型壺・鉢）の遺棄行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・溝底に土器（壺・小型壺・器台・鉢）を置く ・木製品を土器群（壺・器台・高杯）と共に溝底近くに納める ・朱を土器（壺・高杯）を容器として納める 	
	盛土遺存	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器（高杯）の転落 ↓ 土器（高杯）の遺棄行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝底に大量の土器（壺・器台）を置く ・炭化材・焼土が土器群と併出 ・特定の周溝に集中して出土 ↓ 儀礼の中心となる方向の存在 ・朱が用いられる 	

次に儀礼の中心となる方向だが、四隅切れの周溝を中心としてきた比企地域がそれを顕在化させていくのに対して、III期以後全周もしくはそれに近い形態を基本とする大宮台地南部においては明瞭でなく、むしろコーナーや陸橋部が重視されているのが分かる。また、土器の出土状況にも大きな違いが見られる。比企地域では周溝底に土器を置く行為が一貫して行われ、IV期以後は周溝がある程度埋没した段階でも完形の土器が置かれる。これに対して大宮台地南部ではIII期までは土器を置いていたものが、IV期以後は破碎され廃棄されるものが中心となり、完形と破片という対照が見られる。土器を火を用いる儀礼についても（4）で述べたが差異が見られる。IV期以後では溝中土坑における儀礼については共通する部分も多いが、やはり破碎や火の使用において差異が見られる。周溝墓外における行為は共通するようである。入り口部における儀礼行為は、ブリッジ際の土器を置く行為とつながるものと思われる。この他にも細かく見ていくれば様々な差異が見られる。特にIV期以後は儀礼の複雑化と共に両者の差異が際立つようである。

表4 出土状況からみた儀礼の様相(3) 一大宮台地南部-

遺跡名	方台部	周講	溝中土坊
明花向 (II期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝へ焼土・炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼 ・周溝への土器(壺・甕・鉢) ↓ 土器(壺・甕・鉢)の遺棄行為 	<ul style="list-style-type: none"> 埋没途中に土器(壺)を置く 	
銀治谷・新田口 (III期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器(壺)の転落 ↓ 土器(壺)の遺棄行為 ・周溝への破砕土器の廃棄 ↓ 破碎→廃棄行為 ・周溝へ焼土・炭化物が流れ込む ↓ 火を使用する儀礼 	<ul style="list-style-type: none"> 埋没途中に土器(壺・広口壺・鉢)を置く ・陸橋部底面に土器(壺)を置く ↓ 入口部の儀礼 ・コーナー底面に土器(壺)を置く ↓ コーナーの儀礼 ↑ ・コーナー上層に細片の土器を廃棄 	<ul style="list-style-type: none"> ・底面に土器(壺)を置く ・上層に土器(壺)を細片と共に置く
銀治谷・新田口 (IV期)		<ul style="list-style-type: none"> ・周溝底・確認面に編年的にも前後関係がある土器を破碎・廃棄する ↓ 儀礼の複次性 ・異なる周溝墓の破片と接合 ↓ 儀礼の同時性 	
銀治谷・新田口 南町 (V期)	<ul style="list-style-type: none"> ・周溝への土器(小型壺・鉢)の転落 ↓ 土器(小型壺・鉢)の遺棄行為 ・周溝へ焼土・炭化物が流れ込む。 ↓ 火を使用する儀礼 ・主体部で土器が使われる 	<ul style="list-style-type: none"> ・上層へ多量の細片の廃棄 ・確認面直下の土器の遺棄 ・確認面直下の土器の破砕 ・コーナー上層へ細片を廃棄 ・周溝墓外から土器が廃棄される ・特定の周溝に集中して出土 ↓ 儀礼の中心となる方向 	<ul style="list-style-type: none"> ・上層に焼土を伴って土器(壺・高杯)を破碎 ↓ 火を用いた破碎

(5) 方形周溝墓における土器使用の意義

a 供獻・廃棄・副葬

方形周溝墓における土器使用の実際について、ここでは(1)～(4)の検討をもとに見ていくことにしたい。

2で見たように、周溝墓出土の土器についてはこれまでに、供獻・廃棄・副葬という言葉に代表される行為の結果という範型が提出されてきた。本稿における検討対象とした両地域の方形周溝墓出土の土器はどのように位置付けられるのであろうか。まず、問題となるのはそれぞれの言葉が意味する範囲であろう。本稿では、供獻とはその場に土器を置くことによる行為とする。次に廃棄とは儀礼に使用した土器を完全に捨て去ることを意図した行為とする。副葬とは主体部に遺骸と共に納める行為を意味するものとする。

本稿において検討対象とする両地域における供獻行為と考えられるものは、方台部に周溝へ転落する位置に置かれる土器群、周溝内に置かれる土器群が示すものである。これには杉崎氏の言う遺棄行為が含まれる。即ち儀礼行為において使用された状態を保ったままの土器を、ある位置に放棄する行為を言う。これには規則的配置に代表される強い意図が感じられる。土器の放棄によって周溝墓の儀礼をより具体的に視覚化し、その周溝墓の外にいる生者に死者の空間を主張することに意味がある行為と考えられる。従ってここには、穿孔行為を施された土器群も放棄という条件を満たせば含まれることになる。両地域における「供獻」の差異については前述したが、それは地域間、遺跡間、あるいは遺構間において、この行為に関する緩やかな規範のみが存在していたことを示すものである。

よく言われる方台部における儀礼に使用した土器を片付けたとする行為は本稿の対象とする地域では認定できない。が、それらも放棄し、墓域内に留めることに意義があるとするならば、ある意味で供獻されていると言えるかもしれない。

次に、廃棄は銀冶谷・新田口遺跡の各周溝墓に代表されるように破碎されることを前提としている。即ち儀礼に使用された状態を留めないことを前提とする。後述するが、この行為には供獻における「完形」に対するものとしての、廃棄における「破壊」の観念が作用していると思われる。即ち儀礼に使用した状態のまま放棄したのでは意味をなさない場合にこの行為が行われると考えられ、これは儀礼そのものの性格に起因するものと思われる。より確実な儀礼状態の破壊が求められる場合に必要と考えられる。

副葬は厳密に言えば前述したような意味範囲を指すものである。南町I遺跡の出土例は主体部底面から10cmほど浮いており、加えて遺存部分が浅く、副葬品と断定することはできない。主体部内あるいはその上における埋葬儀礼の土器使用と、前述したようにその際に火の使用を示すものと考えられる。

b 穿孔と破碎

穿孔行為と破碎行為の実際については前述した。ここでは、その意味について考える。まず、両者ともその目的が「破壊」にあることには変わりがなく、その破壊行為におけるレベルの差がこの

両者になって現れていると考えられる。このレベル差の要因は、その使用される儀礼にあると思われる。即ち、穿孔しなければならない儀礼と、破碎しなければならない儀礼があるということである。これは前述の供獻と廃棄とも対応する。即ち前者においては儀礼状態の保存が目的であり、後者は破壊が目的である。穿孔行為は儀礼状態の終了を象徴的に示すものであるが、同時に器形を保存し継続性を合わせ持つ。この両義性にこそ、穿孔行為の意味がある。即ち、儀礼行為の中心となる土器に終了を象徴させねばならないほどの強い儀礼が行われ、その行われたこと自体は保存されなければならないのである。その強い儀礼枚の穿孔であり、それが行われるのが限られているため出土遺構が限定され、象徴する土器が限られるため遺構に対する出土個体数も少ないのである。従って中耕遺跡における穿孔行為は、III期まで主体的でなかったこの儀礼行為を導入した結果、その意味が失われたものと考えられる。この強い儀礼が行われる周溝墓の被葬者が、集落内における特別の位置を占めることは想像に難くない。ただし、穿孔行為は規模が大型のものにももら論みられるが、それのみに限られるものでもないようである。このことは被葬者の性格を暗示している。駒見氏がいうミコ的司祭者であるかどうか述べる用意はないが、興味ある見解だとは言えよう。

破碎行為はこれに対して「破壊」が前面に押し出されている行為である。これが「廃棄」と結び付いていることがこの行為の意味を示している。即ち、穿孔行為は儀礼行為の終了と保存という両義性を合わせ持つ行為であるが、破碎行為はより強い儀礼行為の終了を象徴させるものであり、その結果は廃棄され保存されないものである。この行為が穿孔行為と区別して行われていたことはさらにその独自の意味を強調している。穿孔行為が保存されなければならない強い儀礼に対応するものであるのに対して、破碎行為は保存を前提とせず、逆に儀礼行為の終了自体を強調することに意味がある。これは儀礼そのものが異なるものであることを示し、顕在化するのは（2）で見たようにIV・V期であり、儀礼が複雑化してからのものであることは興味深い。鍛冶谷・新田口遺跡のような破碎・廃棄行為は一般的ではないが、上層出土の遺物群は周溝墓における儀礼行為の終了をも象徴するものと考えることができる。また、この行為も出土する遺構が限定されているが、これも規模の大小によるものではないようである。穿孔土器とは用いられる被葬者の性格が異なる可能性も考えられるが、集落における何らかの別の位置を占めるものであったと考えるに留めたい。

c 加熱行為

本稿の対象地域における土器に対する加熱行為が「煮沸」にその目的がないことについては前述したとおりである。では、どのような目的で加熱行為を行ったのであろうか。

この器物に見られる火の痕跡とは別に、周溝内から焼土や炭化物が見られる場合があるのはよく知られるところである。筆者は「方形周溝墓と火」（福田1993a、以下「火」とする）においてそれらに検討を加え、周溝底、中層、上層、溝中土坑の各層位で見られることから、儀礼の各段階で火が使用されると推定した。本稿における土器に見られる加熱行為も出土状況からは同様の様相を示すと思われる。「火」ではこの周溝墓における火の使用的痕跡を、E・リーチ氏のダイアグラム（リーチ、E 1974）を参考に、火の持つ媒介性、浄化機能、境界性から、儀礼における境界的局を作り出すのに象徴的な役割を果すものと考えた。既に田代克巳氏（田代1986）や辻本宗久氏（辻本1987）は、周溝墓における火の痕跡の具体的な様相を焼却による（木製品の）「けがれをはらう」行為、「共

食」「共購」の後それらを廃棄した行為の結果とする考えを主張している。本稿における検討では「共食」の存在を実証することはできない。また、「けがれをはらう」行為とするのも儀礼状態の破壊である穿孔行為との前後関係において、加熱が先に行われることから当たらないと考えられる。また、「けがれをはらう」のであれば、出土する器物の全てに2次加熱が認められなければならないが、そのような様相は見られない。従って、ここでは「火」における結果同様に、儀礼における境界的側面を作り出すに象徴的な役割を果すものとして火が使われ、その火に関わる何らかの行為の結果として土器に2次加熱痕が見られると理解しておきたい。なお木製品については中耕遺跡21号周溝墓で炭化した状態で棒状の木製品が出土しているが、この焼却は儀礼における使用の後行われたものと考えられ、田代氏の言う「けがれをはらう」行為に該当する可能性がある。

d 木製品との伴出

中耕遺跡においては13・21・33・41号周溝墓において木製品が出土し、13・21・41号においては土器と伴出している。この土器利用はどのようなものなのだろうか。

周溝墓出土の木製品については「方形周溝墓と木製品」(野中・福田1994)において検討を加えた。その中で、41号周溝墓出土の鋤のような掘削用具の出土を「何らかの儀礼を伴って、周溝内あるいは周溝底の施設内に造墓に使用した」(P155 11~12) ものを納めた結果とした。伴出する底部穿孔の壺はその儀礼の際に用いられたものと考えられる。13・33号周溝墓の棒状木製品については「木柱」的な性格を推定した。周溝中にそれを立てたものではなく、方台部上や周溝墓群中に立てられたものがある時点で納められたと考えられる。従って、この木製品と共に出土する底部穿孔壺、器台、高杯は、この「木柱」と共に儀礼に用いられ、その後同時に周溝内に納められたものと思われる。これらの木製品も放棄することにより、その儀礼の終了と存在を強調することに意味があると考えられる。ここで注意されるのが底部穿孔壺の伴出である。穿孔行為の意義を先に述べたように、終了と存在の象徴と考えられるのであれば、木製品の示す様相と一致する。木製品はその材質ゆえ遺存しにくく、どの程度一般的に用いられていたかは不明だが、これらの例は木製品と土器を共用する儀礼の存在を示すものであり、新しい視点を提供するものである。

21号周溝墓における木製品と土器群の伴出も同様に評価できるが、この場合は木製品を焼却=破壊する点において13号周溝墓より強い儀礼行為があり、終了を強調する必要性があったことが分かる。

e 儀礼の複次性

周溝墓出土の土器群が、その出土層位と状態によって、儀礼の複次性を表していることについては「方形周溝墓と儀礼」(福田1991)で述べた。その端的な例が銀治谷・新田口遺跡12号周溝墓だが、本稿で対象とした両地域における他の周溝墓の様相からもそのことが容易に窺える。それが畿内で言われるような方台部の複数埋葬に対応するものであるかは、方台部の遺存が皆無である当地域においては明らかにできない。もち論その可能性もあるが、ここでは多様な出土状況、土器の在り方が各々の儀礼における土器の多様な使用を意味するものと理解するのに留めておきたい。

また、筆者はこれまで儀礼のダイアグラムの構築を進めて来たが、それらは地域性や遺構の個別性を踏まえて総合化したものではなかった。地域内におけるダイアグラムの構築は可能だが、それ

は総合化の段階で提示することにしたい。

5. 儀礼における地域性の変質に関する予察

3・4で見たように、比企地域、大宮台地南部の両地域における儀礼における土器使用の様相は、穿孔・破碎と言った破壊行為、出土状況から考えられる土器の取り扱いのいずれの場合においても、差異が見られる。それは周溝の平面形態の差異から予想される空間の使用方法の違いと合わせて、両者の何らかの質的な差異が背景にあることを示している。その背景がどのようなものであるのか、ここで述べる用意はないが、弥生時代における土器や石器の地域性と通底するものであることは容易に予想され、当時の社会生活と密接な関係があるものと考えられる。

弥生時代における地域性が、古墳時代に至り変質することについては前述した。集落跡における土器を中心とした「東海化」「畿内化」が時代の変化を支えるものとしてよく言われるが、この両地域における様相は、単純化された画一的な「一化」と呼べるよう國式が妥当でないことを示している。中耕遺跡における底部穿孔土器の在り方は、完形を主体とするという従来の方法に「底部穿孔」行為という新しい方法を導入した結果、本来の「穿孔」の意味が失われ、極度に肥大化したものである。鍛冶谷・新田口遺跡、南町I遺跡における「破碎」→「焼棄」行為は儀礼の終了を象徴する先鋭化した行為であり、「底部穿孔」を主体とした地域が「破碎」行為を取り入れた結果、同様に肥大化したものと考えられる。この両者は、IV期以後に弥生時代の儀礼体系が変質する際の新しい行為の形骸化した導入を示すものであり、他者の外圧による一元的儀礼の画一化とはとても捉えきれない。新しい行為の導入に当たっても、その地域独自のフィルターにかけられて導入されたと考えられ、強制的なものではなく、あくまで主体的導入であったと思われる。この導入の繰り返しによって、従来の方法が内的に崩壊し、伝統的墓制としての周溝墓は解体していくのでろう。

6. 小 結

以上、比企地域、大宮台地南部における方形周溝墓の死者儀礼について、土器およびその出土状況を中心に検討し、これまでの筆者の検討を踏まえて出土土器の意味する儀礼行為について考察した。ここで見たように、共通する部分も多いが、近接する両地域においてさえ、その様相に様々な差異が見られた。これは、他地域についても同様であると考えられる。既に『関東の周溝墓』に関東地方の儀礼の様相を概括した論考を提出したが、その冒頭にも述べたとおり、本来的にはこれらの作業の積み重による差異と共通性を総合化することにより、方形周溝墓における儀礼の全体像が描けるものと考えている。従って、これらの地域性を踏まえない分析手法は妥当ではないと考えられる。その点については筆者も自戒している。その意味でも、まずはこの作業を今後も積み重ねての作業の積み重ねによる差異と共通性を総合化することにより、方形周溝墓における儀礼の全体像が描けるものと考えている。

残された課題について挙げるならば、まず出土土器の編年をはじめとする土器そのものについての理解を進めねばならない。今後の作業の前提である。次に、地域性を支えるものは何なのであるか。逆にこれだけ内容が異なりながら、何故同一の墓制「周溝墓」にこだわるのであろうか。こ

れらを支える「規範」が問題である。本論中でも述べたが、それは恐らく土器や石器の地域性にも通底すると考えられる。それらの検討を通してこれから問題にしていかねばならないだろう。加えて土器の問題も含めてだが、周溝墓の儀礼と下道添遺跡、中耕遺跡でも併存する前方後方形周溝墓における儀礼との関係性、更に前方後方形墳における儀礼との関係、逆に再葬墓との関係も問題である。

また、「方形周溝墓と境界」(福田1990)で扱ったような周溝墓に見られる事象の内在する問題については、今回は触れない。筆者の類推の方法に問題があるとの指摘は色々な方々と対話する中で日々感じており、またその後学習を重ねる中でも痛感している。まだ、具体的な方法を発見するには至っていないが、いずれ論じたいと考えている。

死者儀礼はその社会における活動の一側面に過ぎず、日常生活や経済活動と相互に影響し合って複合的な実像を形作っている。社会構成的視点を提供するのもまた事実である。残念ながら、その実像について言及することは当分できそうにない。そのための学習もこれからである。

道は遠いが歩を進める時間はまだあると信じたい。続編を期し、懇意したい。

謝 辞

本稿は様々な方々と対話を重ねる中でできあがったものである。特に、以下の方々からは検討方法についての示唆や、資料の実見について便宜を計って頂いた。文末ではあるが衷心から感謝申し上げたい。ありがとうございました。(敬称略)

石倉深雪、伊藤和彦、伊藤敏行、書上元博、柿沼幹夫、栗岡 潤、齋持和夫、小島清一、小林真実、駒宮史朗、塩野 博、杉崎茂樹、鈴木孝之、中村倉司、中山浩彦、西口正純、細田 勝、村田健二、山川守男、山岸良二、吉田 稔

本稿は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団平成4年度研究助成の成果である。

(1994年10月24日稿了)

註

- (1) 埼玉県分については柿沼幹夫氏が検討を行っている。氏のご好意により原稿を拝読させて頂いたが、未発表稿であるため、引用は行わず、参考にさせて頂くことも控えた。従って以下における土器の位置付け、評価は筆者独自のものであることを断っておきたい。
- (2) 本来は先学の成果について子細な検討を加え、問題点を抽出し、そこから研究課題を得るべきなのだろう。本稿でも当初そのように考え、作業を進めていたのがあまりにも長文となってしまったため、改めて一篇として別に発表することにした。
- (3) 各期の位置付けは『関東の周溝墓』と同一とした。ここでは大まかな位置付けと考えて頂きたい。I期-弥生時代中期中葉(所謂須和式)、II期-中期後葉(所謂宮ノ台式)、III期-弥生時代後期、IV期-古墳時代前期前半(庄内式併行)、V期-古墳時代前期後半(布留式併行)とする。
- (4) 報告書中では「一墓」とされているが、全体の統一を計るため「一周溝墓」とした。
- (5) 入西遺跡群においては、特異な大型の直口縁の壺が見られる。村田健二氏は広面遺跡出土のものを壺と呼称し、杉崎茂樹氏は中耕遺跡出土のものを大型壺と呼称している。同様の器形の中型、小型のものはよく知られているが、これほど大型のものは入西遺跡群以外では深谷市東川端遺跡などで若干類例が認められるのみで、多く一遺構、

一遺跡から多く出土している例は関東地方では認められないようである。杉崎氏はこの差の系譜を畿内の布留系
壹に求められるとしているが(杉崎1993P302)、畿内のものは中型・小型品のみのよう、入西遺跡群のように
大型で、赤彩し、周溝墓から特に出土するものではない。ここでは他の壹と同様の取り扱いを受けていることか
ら壹として取り扱ったが、入西遺跡群においてのみ儀器化したものなのか、またその系譜は本当に畿内に求め
得るものなのかは、別稿にて集成作業の後、他地域と比較を行い、論じることにしたい。

引用・参考文献

- 伊藤敏行 1986 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集IV』 P43~89 (財) 東京都埋蔵文化財
センター
- 1988 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集VI』 P1~69 (財) 東京都埋蔵文化財
センター
- 岩松 保 1992 「溝内埋葬と方形周溝墓」『究班』 P59~78 埋蔵文化財研究会
- 大塚初重・井上裕弘 1969 「方形周溝墓の研究」『駿台史学第24号』(後に明治大学考古学専攻講座『駿台史学論集』
1973 P266~337に再録)
- 大庭重信 1992 「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢 第26号史学』 P89~113 大阪大学
- 甲斐博幸 1994 「南関東地方方形周溝墓導入期の問題点」『考古学ジャーナルNo.374』 P7~10 ニューサイエンス
社
- 柿沼幹夫ほか 1988 『川口市史 通史編上巻』 川口市
- 勝部明生 1976 「穿孔土器の考察—船橋遺跡出土例を中心として—」『横田健一先生還暦記念 日本史論叢』
- 金井暉良 1972 「関東地方の方形周溝墓—方形周溝墓の社会構成史的研究」『考古学研究第18巻4号』 考古
学研究会(後に金井暉良・1981「古代東国史の研究」P24~84埼玉新聞社に再録)
- 北武藏古代文化研究会(編) 1988 「東日本の弥生墓制—内穿墓と方形周溝墓—」
- 原史墓制研究会 1972~76 「原史墓制研究1~4」
- 創持和夫 1984 「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集 (財)
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小島清一 1990 「鐵治谷・新田口遺跡V」戸田市遺跡調査会報告書第2集 戸田市遺跡調査会
- 1994 「鐵治谷・新田口遺跡VI」戸田市遺跡調査会報告書第4集 戸田市遺跡調査会
- 小林三郎・中島広顯 1993 「東京都豊島馬場遺跡の古墳出現期の方形周溝墓群とその性格」『日本考古学協会第59回
総会発表要旨』 P59~63 日本考古学協会
- 駒見佳容子 1985 「葬送祭祀の一候附—関東地方を中心として—」『土曜考古第10号』 P27~40 土曜考古学研究会
- 塙野博・伊藤和彦 1969 「鐵治谷・新田口遺跡」戸田市文化財調査報告II 戸田市教育委員会
- 塙野 博 1981 「上戸田本村遺跡」『戸田市史 資料編1』 P167~195 戸田市
- 杉崎茂樹 1993 「中耕遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木孝之 1991 「代正寺・大西」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木敏弘 1972 「関東地方における方形周溝墓出土の土器」『常陸須和間遺跡』 P159~176 雄山閣出版
- 田代克巳 1986 「いわゆる方形周溝墓の供獻土器について」『舟橋造と他界観』 P82~111 雄山閣出版
- 田中清美 1988 「弥生時代前中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集II』 P33~50 考
古学を学ぶ会
- 谷井 慶 1974 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- 辻本宗久 1987 「弥生時代の埴輪墓記について—大阪湾沿岸地域の資料を中心として—」『花園史学第8号』 P
89~101 花園大学史学会
- 中島 宏・小島清一ほか 1984 「池守・池上」 埼玉県教育委員会
- 中村倉司・瀬瀬芳之 1990 「東川端遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事

業団

- 西口正純 1986 「鎌治谷・新田口遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 野中 仁・柳田 紘 1994 「方形周溝墓出土の木製品」『研究紀要第10号』P 115~160 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 春成秀爾 1993 「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』P 47~91 国立歴史民俗博物館
- 坂野和信 1987 「下道添遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田 聖 1987 『南町遺跡I』戸田市遺跡調査会報告書第1集 戸田市遺跡調査会
- 1990 「方形周溝墓と境界」戸田市史研究第8号 P 1~21 戸田市立郷土博物館
- 1991 a 「方形周溝墓と儀礼」『埼玉考古学論集』P 555~568 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1991 b 「溝中土壤小考」『研究紀要第8号』P 9~36 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1993 「方形周溝墓と火」『戸田市史研究第9号』P 32~60 戸田市立郷土博物館
- 1995刊行予定 「関東地方における方形周溝墓の死者儀礼」(仮題)『関東の方形周溝墓』
- 水村孝行 1980 「根平」埼玉県遠跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会
- 宮 昌之 1983 「池上西」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村田健二 1990 「広面遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 柳田博之・山田尚友 1987 「本村遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第80集 浦和市遺跡調査会
- 山岸貞二 1989 「穿孔土器論兼備—南関東「周溝墓」出土例を中心にー」『史館第21号』P 109~122 史館同人
- 1990 「供獻土器論—穿孔土器を中心にしてー」『原始・古代日本の墓制』P 133~136 同成社
- 吉田秀則 1990 「滋賀県下の方形周溝墓の供獻土器について」『紀要第3号』P 20~33 (財) 滋賀県文化財保護協会
- 吉田 稔 1991 「小敷田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- リーチ、E 1974 (原典初版1961) 「時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ」『人類学再考』P 207~231 思索社

付 記

脱稿後、伊藤敏行、柿沼幹夫、山岸良二の3氏から、編年的誤り、地域的誤り、地域設定の是非、資料選択の恣意性、立地を無視した遺跡の選択、周溝形態の考慮不足、穿孔土器の安易な取り扱い、群構成観点の欠落、未読の論文の存在について指摘を受けた。詳しくは別稿に譲りたいが、首肯される部分が多くあった。本稿には生かせなかつたが、今後の検討に生かしていきたいと考えている。3氏のご好意に感謝する次第である。

(1995年3月29日 記)

研究紀要 第11号

1994

平成7年3月25日印刷

平成7年3月31日発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社